

---

# 二人の狐の聖杯戦記

チエーザレ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

二人の狐の聖杯戦記

### 【Zコード】

Z3045X

### 【作者名】

チヨーザレ

### 【あらすじ】

突然の死を経験した彼は、目の前の天使（自称）に転生の話を持ちかけられ…これを受けた。そして転生先で自分の人生を歩んでいた彼は、前世でも知る、とある戦い…第四次聖杯戦争に招かれる。初投稿です。どうか暖かく見守ってください。

## 第一話 とある吸血鬼狩りにて（前書き）

初投稿です。

アニメ Fate/Zeroに刺激されて書いちやいました。  
どうかよろしくお願いします。

## 第一話 とある吸血鬼狩りにて

この世界には吸血鬼といつものが存在する。

最もそれらは、世間一般に言われている『吸血鬼』とは違つ部分もある。

この世界の吸血鬼たちは霧や蝙蝠に姿を変えたりすることは出来ず、その能力もあり方も個体によって多種多様すぎており、中にはその『存在』そのものがおよそそういうものたちとは明らかに違ひすぎる者もいる。

だがやはり、多少の例外はあってもほとんどの吸血鬼は吸血鬼であつて、日光が苦手で、聖なるものが天敵で、傷はすぐ治り、桁外れの力を持ち、何よりも…自らのために『血を吸う』。

このフランスの片田舎の間に身を潜めているこの男も吸血鬼。その中でも自身の存在の維持のために人の血を吸う、いわゆる『死徒』という部類の吸血鬼だった。

そして今、この死徒は夜にまぎれて一人の男を尾行している。

理由は単純、「吸血」のためだ。

目的の男は、今も結んだ黒髪の長髪をたなびかせ歩いている。

なぜこの男を狙うのかといつと、理由は至極単純……町で見かけたこの青年の血が、

えもいわれぬいい香りだったからだ。

もちろんこの男が血を流したわけではない。  
だが死徒のすぐれた嗅覚を使えば、対象の血の匂いぐらいは皮膚の  
上からでもかぎわけられる。

そして尾行している男の血の香りは、死徒としてそれなりの経験を  
積んできたこの男にしても、  
今まで全く経験したことのないほど素晴らしい……まるで極上のワ  
インのような  
芳醇な香りがした。

何としてもこの男の吸血をしようと、尾行をし続けて八時間。

運の良いことに、何故か件のターゲットは人気のない森の方…しか  
も夜に  
一人で歩いていった。かなり不自然な行動だが、血の香りに惑わさ  
れてトリップ状態の  
この死徒にとつては関係ない。

ただ、ようやくチャンスがきたと喜ぶのみだ。

そして今…襲うのに最高の状況と判断した死徒は、一瞬のうちに獲  
物に飛びかかった。

…………が、その姿が突如消える。

そして気づいた瞬間には、自身の急所の一つである心臓を貫き、  
胸から飛び出した白銀の刃が視界に入った。

「なツー？…………ガアアアアアア…………ツツツ…………」

凄まじい痛みに死徒は絶叫を上げる。急所の心臓を、しかも……長年の経験でなんとかわかつたが、自分たちにとつて絶大な効力をを持つ『聖性』が……それもどびきり強力なものがこの刃に宿つていることをこの死徒は理解した。

だがそれだけ…………。

数秒後には、その体は跡形もなく消滅していた。

「ふう……予想よりもあつさり片付いたな。

△ランクだからもつと手にいざると思っていたが

「そう言つて”先程尾行されていた男”は、「田標」を貫いた自身の獲物を拭<sup>ぬぐ</sup>うと

懐から携帯を取り出し、自分の情報提供者に報告を始める。

「もしもシニック……いや、今はジヨンか。

ああ、報告だよ。目標の撃破に成功した。

証拠として奴の魔力がこもつた血を送るぞ

「フォックスか？了解。報酬の情報は『例の日本の拠点』に送るぞ。しかし△ランクを瞬殺とは、相変わらず化け物じみてるなあ

「否定はしないが今回は運もあるぞ。正直あそこまで『番り』にやられてるとは思つてなかつた

「…………」

「本当に前の特異体质は反則だよな。まあ仕事をこなしてくれればそれが何より。『結果よければ全て良し』だ」

「理解があつて助かるよ。それと『例の戦争の』ことでなにか追加の情報は

入つたか？墓参りが済んだらすぐにたつて準備しなきやならなくな

るからな。

何かあれば今のうちに教えて欲しい」

「ああ、もうそんな時期になるんだな……。早いもんだな八年で……」

…

「ジョン……師匠の思い出にひたつてくれるのは素直にありがたいけど

一応『急ぎ』だからな……。正直俺もあまり時間がなくて……」

「つと一すまんすまん、つい知り合いの弟子の成長が嬉しくてな。『例の戦争』についてだが、追加情報は入つて。どうやら”間桐”からも参加者がでるらしい」

「”間桐”からあそこは今回は見送るんじゃなかつたのか？あと一ヶ月で始まるのに、今まで誰も参加者を立てなかつたんだもん？」

「そのはずだが、去年に家を出奔していた現当主の弟を呼び戻して、鍛えていたらしい。今回は、ソイツをマスターとして参加させるようだ」

「今まで魔術師でもなかつた男をたつた一年で”マスターに鍛える”？」

御三家も随分と無茶をするな……」

「それについては大いに同感だ。まあこれで、参加するマスターは

お前を含めて6人になつたわけだ。あと一人についてはいまだに不明だが、有力なのは例のロード＝エルメロイの聖遺物を盗んだという奴だろうと俺は踏んでる。現在判明している情報はこれぐらいだな」

「分かった、情報感謝する。じゃあ俺は、そろそろ墓参りに行くよ。……これでしばらく『死徒狩り』は休業だな」

「”第四次聖杯戦争”か……まあ、とりあえず死なないよう気をつけるよ。

健闘を祈つてゐる」

「了解

最早話すことは終わつたと携帯をしまい、半年前に右手に宿つた”令呪”を見つめる。

この世界に転生してから既に三十年近く……色々と前世では味あわないであろう経験を積み続けてきたが、この”シルバー・フォックス”という、とある有名なアメコミヒーローの恋人の名前を持つ男にとつては、これから始まる戦争は、転生してからの彼にとつて最大と言える一世一<sup>せい</sup>代と言える大事だつた。

しばらくしてから令呪を見つめることをやめると、フォックスはこの世界に来てから最も世話になつた女性の眠る場所に歩き始めていた。

第四次聖杯戦争まであと二月。

## 第一話 夢と飛行機とマインツベルンにて（前書き）

——話題です。  
がんばりますーー！

## 第一話 夢と飛行機とアインツベルンにて

『それでは転生するにあたって欲しい能力を言ってください。あ、でも世界のバランス崩すようなのはダメですよ。例えばドラゴンボールとか、悪魔の実の能力全部とか』

目の前の天使（自称）が尋ねる。

さすがにそんなのを貰うつもりはないが、

もし何か能力が手に入るならやはり今の自分が望むのはこれだろう。

『それなら…… そうだな、再生能力をくれ。

具体的には、X-MENのウルヴァリンの**ヒーリング・ファクター**肉体再生能力が欲しい』

『これはまた…… 珍しいのを選びますね。出来ますけど、どうしてそれを』

『どんな能力持つても人間で弱いからな。頭や心臓が傷つけばすぐ死ぬし、

毒や病気、空腹や疲労でも死ぬ。俺みたいにトラックではねられたりしたら

いわずもがなだ。一度目の人生でまでそんなふうになりたくないからな』

これは今の自分の率直な気持ちだ。

どうも、一度人生を強制的に終わらせられて死ぬのがずいぶん怖くなっているらしい。

一度経験した『死』は、かなり自分に影響を与えたようだ。

『能力が発動するのは転生してしばらく後…… そうだな…… 少な

くとも

俺が自立してからにしてくれ。

生まれた時から超速再生能力なんて持つてたら絶対ろくな扱い受けないから』

『わかりました、手配しておきますね。じゃあそろそろ行きましょうか』

『よろしくたのむ。あと、ありがと』

『いえ、じゃあ一度目の人生頑張つてくださいね』

そう言って彼女が腕を掲げると自身の足元に魔法陣のよつなものが現れたことに気づく。

『いよいよらしい……果たして一度目の人生とはどんなものだらう。そう考えていると、ふつと俺の意識は闇に沈んだ。

ふつとフォックスは目を覚ます。同時に意識もすぐに鮮明になる。  
"肉體再生能力"。この能力は常に彼の体を最良の状態に保ち続けるが、それは精神面も例外ではない。およそ寝起きが悪いという事とは無縁で、起きたらゴルゴー3のように一瞬で覚醒状態になれるのだ。

「……あの天使（自称）……また何か起きるな

少し溜め息まじりにつぶやくと、フォックスは旅客機の窓から外の景色を眺める。

既にフランスを飛び立つて三時間経つが、目的の地に着くのはまだ

まだ先だ。

……転生の夢。

彼がこの世界でこの夢を見たのは今回で三度目になる。そして今までの一回には、

共通して夢のあとに”転生したこと”と関係の深いことが起きた。

まず一度目時には、夢を見てから数日後に新たな故郷であるイギリスの村が

死徒に襲われ、逃げた森で出会った　　当時『死徒』だった師匠に吸血され、

そのショックで肉体再生能力が目覚めた。

二度目は師匠に引き取られてからのこととで、十五歳のクリスマスだった。

翌朝にあの天使（自称）から”サービス”と称して今の彼の愛刀であるアダマン・フレード最硬剣が、ご丁寧に説明書と共に枕元に置いてあつたのだ。

彼が転生者であることを明かしたのは師匠であるアマリアだけだったので、

事情を知っている彼女から「クリスマスに武器を送るサンタなんてはじめてみたわよ

とからかわれたのはいい思い出だ。

そして三度目の今回……。

これから何が起きるのかはわからないが、おそらく今回も”何か”が起きるのだろう。

そしてそれは、ほぼ確実にこれから始まる聖杯戦争絡みだろう。

思考を続ける……日本に着いてからのことを見頭の中で一通り確認し終えると

フォックスは再び眠りについた。ヒーリング・ファクター肉体再生能力は

能力の持ち主である彼に人間をはるかに凌駕する体力を維持させ続けるが、限界はある。

能力を酷使し続ければ、いずれ再生がきかなくなつてくるのだ。だが、定期的に休息をとつていればそんなことはまず起きない。よつて休めるときに休んでおこうとフォックスはアイマスクをついた……。

……とある北欧の、吹雪が吹き荒れるこの土地。

外部からは完全に隔絶されたこの地の森の中にその”城”はあった。

そのまま文化遺産に登録されてもおかしくない

歴史と威儀を感じさせる古城……だがこの城には今でもしつかりと人が住んでいた。

その城の一室で”男”は作業を進めていた。使っているのはパソコンにFAXと、現代においては特に使っていてもおかしくない電子機器だが

正真正銘、由緒正しき北欧貴族のこの城のなかでは、あまりにも異端に見えた。

その部屋でカタカタとキーボードを叩いている男の名は衛宮切嗣。

九年ほど前、この城の主である、千年続く歴史を持つ魔導の名家アインツベルンに

今回の”マスター”として招かれた、かつて『魔術師殺し』と恐れられた魔術師である。

「切嗣、ご苦労さま」

彼に声をかけた女性…宝口のような赤の瞳と汚れ一つない、まるで雪を思わせる

白銀の髪をたたえた切嗣の妻…アイリスフィール・フォン・アインツベルンは、黙々と

作業を続ける自身の最愛の夫に笑顔を向けた。

「ああ、おはようアイワ」

「もは、時計を見て切嗣」

苦笑混じりで言つ妻の言葉に切嗣は慌てて

パソコンの画面の隅っこに表示される時計を見る。

……もう朝とは言えない……完全に昼間と言える時間を指していた。

「参ったな、また作業に没頭しすぎたみたいだ」

「頑張つてくれるのは頼もしいけど、無理して体を壊したりしないでね。

聖杯戦争まであと一月ちょっとなんだから

心配そうに語りかけるアイリスフィール。ここに所、彼女はいよいよ戦争直前となつて

最後の仕上げとばかりに戦いの準備を続ける切嗣が心配だった。

荒事は素人である自分たちに代わり、勝利のために頑張ってくれてはいるが

最近は今日みたいに夜から昼までぶつとつしで作業をし続けることもよくあつたのだ。

その理由は、ノルマを早く終えて娘のイリヤスフィールと遊んであげる時間を作つてあげるためなのだが…ゆつくり休んで欲しいという思いもあつた。

「追加の情報が入つてね。例の不明だつた二人のマスターの内、一人が日本に入ったよつだ……見なよ」

そう言つて切嗣が促したパソコンの画面をイリヤスフィールは覗く。映つているのは、ややハネた長い黒髪を後ろでまとめたまだ二十歳そこそこに見える青年。顔立ちから見るにおそらくヨーロッパ系だろう。

「シルバー・フォックス

八年前から活動を始めたフリーのヴァンパイアハンターで魔術師だ。これまでに単独でおよそ300以上の死徒を葬つている。そのうち二十二体は

危険度Aランク相当の死徒で、なかには一十七祖に匹敵する死徒も討伐している。

……強敵だよ

その内容にアイリスフィールは驚く。彼女も詳しくはないが、死徒のことはある程度知つていて、一十七祖クラスともなれば正真正銘の化け物だ。

少なくともフリーランスが一人で挑むような相手ではない。この若者がそれだけの力を秘めているというのだろうか。

そんな妻の気持ちを察したのか、切嗣は説明を続ける。

「見た目どうりの年齢ではないよ。どういう手段を使っているのかは不明だが……これまでの写真を見る限り何年も外見が変わらない。

多分何らかの方法で老化を抑えているんだろう。

……言峰綺礼とは別の意味で危険だろうな。

おそらくこの男は”マスター”という弱点には成り得ない

聖杯戦争における基本的な戦術のひとつとして

”サーヴァントではなくマスターを狙う”というものがいる。

クラスや英靈としての格の差はあれど、いすれも歴史に名を残す英雄である

サーヴァントたちは、大抵実力が横並びとなるため簡単に打倒することはできない。

そこで狙われるのがサーヴァントに現界のための魔力を供給しているマスターである。

超常の存在であるサーヴァントと違い、マスターはただの人間であるため

仕留めるのはサーヴァントと比較すると遙かに容易なのだ。

また、マスターをつとめる魔術師という生き物は

基本的に学者肌の者ばかりで、一部の例外を除き殺し合ひの経験などない。

そしてこの衛宮切嗣といつ男も、その”例外”に属する男であり、同時にマスターである魔術師を仕留めるエキスペリートでもあった。

#### 『魔術師殺し』

多くの魔術師をその魔術師らしからぬ方法で裏を搔き、葬り続けてきた実績をかわれ  
AINZ BELNに招かれた切嗣は、今回の聖杯戦争でも暗殺者としての自身の  
スキルを生かし、敵のマスターを闇へと葬り去ることを戦術に取り  
入れていた。

……が、自身と同様戦いのプロが参加するなら話は違つてくる。

これは言峰綺礼にも言えることだが、このシルバー・フォックスと  
いう男には

”暗殺”といふのはかなり難しいだろう。この男が倒してきた『死  
徒』…その中でも  
二十七祖に匹敵するという死徒はすなわちサーヴァントにも迫る力を  
有していたということだ。

それを狩りとつたこの男もそれだけの戦闘力をそなえているのだろう。

それだけの実力があるのなら戦闘でサーヴァントの足でまといになる  
ということはまずないだろうし、敵のサーヴァントを自身のサーヴ  
アントで足止めして、

対峙している敵マスターを狙つたりすれば簡単に仕留めることができ

能だろ？

「戦略の練り直しが必要だな……アイリ、おやりく今回の聖杯戦争はかつてないほどに激しくなる。伝説の騎士王を呼び出せたとしても、決して油断はできないだろ？……」

そう言つと切嗣は再びキーボードを叩き始めた。これまでに判明しているマスターたちも十分強敵と呼べる者たちばかりだが、この男も他のマスターと同等以上に厄介な敵となるだろ？僅かに険しい表情で作業を続ける切嗣だが、突如その顔が沈痛なものへと変わり、横で見守るアイリスファイールに向けられる。

「アイリ……その……イリヤに謝つておいてくれないか？しばらく遊んでやれなって……」

辛そうに声を絞り出した切嗣を、アイリスファイールは優しく抱きしめた。

「大丈夫よ切嗣……イリヤはいい子だからちゃんと待つてくれるわ。

でも……私からもお願い、ちゃんと体を休めてね……」

その言葉と共に、切嗣は最愛の妻を抱き返す。常に雪で閉ざされたこの地の城のなかで、その温もりは何よりも心地よく感じられた……。

第四次聖杯戦争まであと一月。

## 登場人物・設定一覧（前書き）

設定つていいでですね。  
ちょっと主人公チート過ぎたかな…………。

## 登場人物・設定一覧

シルバー・フォックス

身長：180cm

体重：76kg

血液型：B

生年月日：3月13日

趣味：鍛錬、文化遺産巡り

好きなもの：フライドポテト、酒（過去）

苦手なもの：極端、死ぬこと、煙草

略歴：主人公。元は一般的な日本人の青年だったが、交通事故により死亡する。

天使を名乗る存在によってTYPE-MOONの世界へ転生。その際下手に死なないよう

X-MENのウルヴァリンの肉体再生能力ヒーリング・ファクターを貰い、新たにイギリスで生を受けた。転生先の名前はウルヴァリンの恋人の名であるシルバー・フォックス。

10歳の時に故郷の村が死徒に襲われ、家族と友人を失い、彼自身も何とか逃げ延びるも当時死徒だったアマリアに襲われ吸血されてしまう。その際肉体再生能力が目覚め、吸血を跳ね除け、常に肉体が最良の状態を保つようになった。その後、彼の血により奇跡的に

死徒化が解けたアマリアに引き取られ、弟子として戦闘技術と魔術を受け継いだ。

アマリアいわく「血がいい匂いがする」「らしく、非常に死徒に狙われやすかつたため、襲ってくる死徒を返り討ちにし続ける毎日を送るようになり、アマリアの死後は、死徒との相性の良さからフリーのヴァンパイアハンターとなり多くの死徒を討伐し、聖堂教会やハンターからは衛宮切嗣のかつての異名をもじつて『死徒殺し』と呼ばれるようになった。

TYPE-MOONの知識はFate/stay nightとFate/Zeroの設定をある程度覚えているが、令呪が宿つたことで、四次の聖杯戦争で起きた冬木の大災害と聖杯そのものの異常を思い出し、調査と阻止を兼ねて聖杯戦争に参加。自身のサーヴァントであるキャスターが白兵戦が苦手なため、代わりに前衛を担当する。

容姿・外見は21、2歳の青年。ハネ気味の黒髪を背中の半ばまでのぼし、首の上でまとめている（四次のスーサイドの髪型と同じ）。目つきはやや鋭く、瞳の色は灰色。肉体再生能力で老化が止まっている。

性格：一度死んで人一倍死にたくなくなつたが、アマリアに異端と関わることになることを指摘され、自分の納得できる死に方ができるよう、強くなることを目的の一つとしている。柔軟と冷静を好み、出来るだけ礼儀には礼儀で返す主義。ややお人好しでノリに流される部分もあり、苦手なのは話が通じない相手。前世では酒が好きだったが、肉体再生能力によつて酔えなくなつたため、飲まなくなつた。ウルヴァリンと違つて大の嫌煙家で、服は黒系を好む。

戦闘方法：総合的な戦闘力は、魔術の強化もあれば白兵戦で四次のセイバー・ランサーとも渡り合えるほどで、特に反射神経や五感の

銳さはサーヴァントをも上回り、銃弾の嵐もリアルタイムで見切つて対応可能。当初の戦闘方法は肉体のスペックと両手首の爪を生かした格闘術だつたが、十五歳のクリスマスにアダマンチウムの刀を天使（自称）から送られてからは、スピード特化の高速剣術に切り替えた。また、銃火器などの近代兵器についても一通り学んである（使用はしない）。

魔術については、自身の能力である『再生』が起源となつており、攻撃系の魔術は一切使えないが、治癒・修復などの支援系魔術の腕は最高クラス。肉体や物質の強化も得意。属性は『水』と『土』の二重属性。某人間ミサイルランチャーとは真逆の特化型である。魔術回路の数は十五本と少なめ（平均的な魔術師は二十本）だが、肉体再生能力により常に魔力が回復し続けるため、事実上再生が続く限り半永久的に魔術を行使することが出来る。

能力：肉体再生能力

ヒーリング・ファクター

ウルヴァリンの有名な能力。単に傷をふさぐだけでなく、魔力・体力・精神力をも回復し続け、副次効果として身体能力や感覚も大幅に強化するチート能力。手首の爪も健在。害となるものを身体から駆逐する効果もあり、毒、暗示、死徒化、果ては呪いの類も完全に無効化する。吸血種の再生能力とは違い、宝具や教会の武装でも回復を阻害することが出来ず、フォックスが酒を飲まなくなつた原因でもある。とはいえ、さすがに首をはねられたら即死する。

武器：アダマンチウム・ブレード

天使（自称）が送ってきたアダマンチウム製の刀。破壊不可能の金属で出来ていて、宝具と打ち合つても刃こぼれ一つしない強力な概念武装。柄の部分に聖印が刻まれているため、カマイタチを含めた全ての攻撃に聖性がつき、吸血種などには非常に有効。唯一の弱点は超高熱で溶かされることだが、フォックスがかけた術式により熱を吸収するよう改良されている。

## アマリア・アルヌール

フォックスの女師匠。フランス人。元は協会の魔術師だったが、ある日故郷が死徒によつて滅ぼされたのを機に協会を脱退。以後はフリーランスで死徒狩りに明け暮れていたが、ある死徒を倒して消耗した隙を別の死徒に突かれ吸血され、死徒となつてしまつ。その後、フォックスの血の匂いに惹かれ、思わず見つけた彼の血を吸つてしまつたが、肉体再生能力<sup>ビーリング・ファクター</sup>の効果で死徒としての自分を破壊され、奇跡的に人間に戻つた。強制的に死徒化が解けた衝撃で肉体にダメージを負つたため、償いも兼ねて死ぬまでにフォックスに自身の技術と魔術の秘伝を伝えることを決意。その後十年の歳月をかけてフォックスを鍛え上げ、さらに一年後息をひきとつた。享年38歳。フォックスが転生者であることを明かした唯一の人間でもある。封印指定ではないが基本に忠実で、その分無駄のない強力な魔術の使い手だった。ちなみに愛煙家で、酒は嫌いだった。

## ジョン

フォックスとは十年近い付き合いがある情報屋。アマリアがフリーランス時代に世話になつていた情報屋で、彼女の紹介で知り合つた。よく名前を変えて活動しているため、覚えるのが大変。ちなみに、一つ前の名前はニック。

令呪が宿つたフォックスの依頼を受け、今回の聖杯戦争の他のマスターの情報をなどを調べていた。

## 第三話 準備と対面して（前書き）

三話です。

龍之介と青島の田那は出ません…「みんなせい。

## 第三話 準備と召還にて

シルバー・フォックスがこの世界がTYPE-MOONの世界だと知ったのは、故郷の村を死徒に襲われてからだった。

自分に戦いと魔術を教えてくれたアマリアに世界を聞かれる内にそのことに気づき、彼女に自分の正体を明かしたのはそれから一週間後だった。

幸いなことにアマリアはそんな自分を笑つて受け入れてくれたし、同時にその事実の危険性も言い聞かせてくれた。

前世のTYPE-MOON知識で覚えていたのは、Fate/stay nightとFate/Zeroのおおまかな設定と流れ程度だったので、アマリアの下で修練に打ち込み、ハンターとして死徒と戦ってきた自分には、いつしかそれらの知識はほとんど無用の長物となっていた。

そんなフォックスにとって転換期となつたのがハケ月前、突如右手に”令呪”が宿つた時だった。

それからとにかく悩んだ。ひとまず情報は集めておくべきと、ジョンに”今回の聖杯戦争”について調べてもらいながら、一週間程この口ロシアイをどうするか考え続けた。

……結論は参加に決まった。一週間の内に今回が何度目の戦いのか調べがつき、Fate/Zeroで起きた悲劇も…聖杯の正体も思い出した。自身という異物イニギューラが混じつた以上、原作知識がどの程度役に立つかは不明だが…それでも、あの凄惨な結末を…あの聖

杯による地獄が前世の故国で起きることを見過すことす道理もない。何より…こつしてマスターの資格を得た以上、もう無関係ではないのだ。

こつして聖杯戦争への参加を決意したフォックスだったが、早速最初の難問にぶち当たつた。

まず問題だったのが準備期間の短さ。そもそも令呪が宿るまで、聖杯戦争の存在自体忘れていたため、アインツベルンなど何年も前から参加が決定していた他のマスターに比べると、情報を集める作業だけでも時間がかかった。

結果として召還に用いる英霊の触媒は用意できなかつたが、戦いの方針は決まつたため、次は戦いの舞台となる冬木での拠点確保に移つたが、ここでも問題が起きた。冬木中を見張つていたアサシンの存在である。

詳しく述べていなかつたが、たしか今回のアサシンはスキルか道具の力で何十体にも分裂する能力を持ち、その特性で常に情報収集を行なつていたということを思い出したのだ。

そのことは冬木の調査中に、気づかれぬようアサシンの一体を罠にはめ、姿を確認したことで証明されたが、これはかえつて戦いの準備の足かせになつた。

なまじアサシンの存在を知つていただけに、冬木での準備作業では必要以上に神経を使うハメになり、  
靈脈の調査さえ遅れることになつたのだ。

……それでもギリギリで準備はできた。そして今夜…サーヴァント

を召喚する……。

冬木に人知れず存在するとある寂れた神社。

半ば地元民からも忘れられたこの場所は、一級とまでは行かなくとも十分な靈脈が存在する、フォックスが召還のために見つけた隠れ重靈地だった。

触媒は使わない……。用意する時間が無かつたのもあるが、聖杯を手に入れる気がない以上、下手に無理して願望のある英靈を召還するよりも、降靈の儀式そのものに全力を注いで、自身と相性のいい英靈を呼び出す方を選んだのだ。

そのために…呼び出すための魔法陣は全て自分の血で描いた。使われた血は、普通の人間なら失血死するほどの量だが、肉体再生能力のおかげで身体にはなんの影響もない。また、自身の魔力を最大限込めた血で描かれたこの魔法陣は、呼び出すサーヴァントの力の底上げにも役立つはずだ。

「告げる」

周囲に厳かな空気が満ち、召還の詠唱が紡がれる。

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば應えよ」

体内の十五本の魔術回路をフルスロットルで稼働させ、詠唱を続ける。

触媒を使わない以上、自身と相性のいい英靈が出てくることは決まつている。

……ならば自分に出来ることとは、他のマスターには真似できない……この再生し続ける肉体を酷使して、出てくる英靈の力を上げることだけだ。

「誓いを此処に。我は常世<sup>ヒニヤ</sup>総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷ぐ者」

全身の神経が悲鳴を上げる。

通常の魔術師なら自殺行為……体内の魔術回路を断裂させる程に動かし、破壊された回路を肉体再生能力が片つ端から修復し続ける。

「汝三大の言靈<sup>ヒトダマ</sup>を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り

手よ　！！

詠唱の終わりと共に眩い光と風圧が辺りに叩きつけられた

……手応えあり！！

儀式は成功した……。

虚勢でも負け惜しみでもない……。それは何年も掛けて積み上げてきた魔術師としての経験が自身にもたらした、まぎれもない”確信”だった。

そして光が収まると共に”それ”は姿を現す。

共にこの戦いを生き抜く　パートナー　サー・ヴァントが……。

「暫ぐ、暫ぐう～～～！」

は？

「謂われはなくとも即参上！？  
サーヴァント『キャスター』。軒猿陵墓けんえんりょううぼから、良妻狐のデリバリー  
にやつてきました～！！  
え～と、あなたが私のご主人様マスターでいいんですね？」

マズイ！？何か間違えたかも！？

## サーヴァント・設定一覧（ネタバレ含む）（前書き）

サーヴァント・ステータスです。  
何度も随時更新していくます。

## サーヴァント・設定一覧（ネタバレ含む）

【CLASS】 キャスター

【マスター】 シルバー・フォックス

【真名】 玉藻の前

【性別】 女性

【身長・体重】 不明

【属性】 不明

【ステータス】 筋力D 耐久D 敏捷B 魔力A++ 幸運B 宝具EX

【クラス別スキル】

陣地作成：B

魔術師として、自らに有利な陣地を作り上げる。  
“工房”の作成が可能。

故郷に召喚されたため、ランクが上がっている。  
ただし、性格的に向いていないらしい。

【保有スキル】

呪術：EX

ダキニ天法。地位や財産を得る法（男性用）、権力者の寵愛を得る

法（女性用）といった権力を得る秘術や、死期を悟る法がある。ただし、キャスターの場合は過去に懲りたのか、あまり使いたがらない。

変化：A

変身が可能。また、玉藻の前と同一視される中国の千年狐狸精の使用した借体成形も出来る。

ただし、キャスターの場合は過去に懲りたのか、あまり使いたがらない。

信仰：A

故国に召喚された恩恵。神の特権として、信仰に縁のある土地の靈脈や氏神を優先的に使役できる。

アマテラスの一人格であるキャスターの信仰は最高クラス。

【宝具】

『水天日光天照八野鎮石』

ランク：EX 種別：対軍宝具 レンジ：1～99 最大補足：1

000人

神宝「玉藻鎮石」。

アマテラスの神体でありハ咫鏡の原型としての能力を一時的に開放し、対象の魂と生命力を活性化させることが出来る。本来は大軍のサポートに使うのが正しいやり方。

本来なら死者さえも蘇らせる冥界の大神宝だが、サーヴァント化している彼女では、そこまでの権限は持てない。ただし、令呪など の強力なバックアップがあればその限りではない。

略歴：みんな大好きキヤス狐。詳細は「Fate/EXTRA」を参照。真名はかの鳥羽上皇に仕えた日本三大化生の一人「玉藻の前」

だが、実際は人間に興味を持ち、アマテラスから分かれた御魂のひとつ。本来神靈であるところを英靈として召喚されたため、かなり弱体化しているが、故郷である日本に召還されたため「EXTRA」の時に比べてパワーアップしている。マスターであるフォックスとの相性の良さ（フォックス＝狐、膨大な魔力供給）もあり、本気を出せばかなりの力を出せるが、彼女自身は過去のトラウマから力の行使を嫌っている。天敵はセイバーとランサー。故郷の国に召還されたからかテンションも上がり気味で、ご主人様絶対主義も健在。フォックスのことは『ご主人様』と書いて『マスター』と呼ぶ（たまにそのまんま『ご主人様』とも呼ぶ）。『EXTRA』同様『幸せな良妻狐』を目指して頑張る。

## 第四話　「れからい」こと縦戦にて（前書き）

四話です！

この小説のキヤス狐ですが、日本に召喚されて機嫌がいいので毒のある部分は割となりを潜めてます。小物や気に入らない相手には容赦ないようですが……

## 第四話 わかのじと緒戦にて

Side・フォックス

沈黙。

この場における状況を説明するのなら、まずこの言葉より適したモノはないだろ？

「えへっと……あなたが私の『ご主人様なんです……よね？ちゃんとしたパスもつながってますし……あの？』

目の前のエキゾチックな格好の『ナニ<sup>マスター</sup>かの言葉でハッと我に帰る。……どうやらあまりに予想の斜め上をいく展開にショックを受けていたらしい。

「その……君が俺のサーヴァント……でいいのかな？」

「はい！サーヴァント『キャスター』。軒猿陵墓から、良妻狐の『テリバリー』にやつてまいりました！――」

そう言って目の前のキッネ耳+尻尾の少女は、まるで花のようになぞに素敵に笑つた。

これが平時なら思わずドキッとしそうなものが、今は混乱で頭がまわらない……。というカリヨウサイギッネ？デリバリー？

「『ご』に契約は成立しました！よろしくお願ひしますね『ご』主人様？何を隠そうこのタ<sup>マスター</sup>いえ、このワタクシ、『ご主人様の』ような人のサーヴァントになりたいってずつと思っていたのです！ああ、しか

もこうして故郷に呼び出してくれるなんて！？今日は本氣でアタリみたいですね～ウフフフ……」

「どんどん一人でハイテンションになつていいく自身のサーヴァントの様子に唖然とするが、今聞捨てならない単語が出なかつたか？”故郷”……？”

改めて目の前のサーヴァントを見る。まず印象的なのは、頭部にある明らかにヒトの器官の”ソレ”とは別のモノだらうキツネ耳。時々ピコピコと動いているから、おそらく本物だらう。…といふか飾りであんなモノ着ける英靈なんていないハズ……そう信じたい。

次に印象的なのは、前から見てもその存在を確認できる、彼女の腰部から生えた一本の巨大な尻尾。頭のキツネ耳同様、こちらもしつかりと生物的に動いている。…といふことは、このサーヴァントの正体は、狐の化身か何かだらうか……。

そして彼女の服装。

一応紺を基調とした和服…のように見えるが、主に胸元や腰辺りの露出度がかなり高い。…正直目のやり場に困る。一方髪の色は綺麗なピンク色で、日本人には見えない。

だがこのコスプレイヤーのような格好の少女から感じられる濃密な魔力は、明らかに人のものではない…。それこそ比べるのが失礼なほどの圧倒的な密度…。

これが 英靈！？

「あ、あの～ご<sup>マスター</sup>主人様？そんなに見つめられたら……たすがに私も恥ずかしいです……」

田の前でもじもじと身をよじるサーヴァントの言葉に再び我に帰る。そうだ！ 召喚に成功した以上、次にやるべきことは決まっている、まずは……。

「自己紹介が遅れですまなかつた。いかにも、俺が君のマスター、シルバー・フォックスだ。今回の聖杯戦争、共によろしく頼むキャラスター！」

自己紹介の挨拶。これから共に戦つていくのだから、できるだけの礼儀と気持ちを込めて言つ。

「いぢら！」そよろしくお願いします<sup>マスター</sup>ご主人様。不肖<sup>マスター</sup>このキヤスター、ひとたびこの身を捧げたのなら、六道輪廻の果ての果て、主の魂魄が尽きるまで精一杯仕えさせていただきます。」

先程までのノリの軽さとは似ても似つかない、真面目な忠誠の言葉に少し面食らう。その動作もまるで流れれるような美しさを伴ついた。

「身に余る忠誠の言葉……嬉しいよキヤスター。とりあえず用意した拠点に移ろう。今の召喚の魔力を他のマスターが嗅ぎつけるかもしれない、ついてきてくれ」

「わかりました ご<sup>マスター</sup>主人様！」

嬉しそうに付き従つ血のサーヴァントと共に、拠点のひとつに向

かう。……ひとまず落ち着いた場所で情報交換もしたいからな。

まあ、上手くやつてこく」とは出来そうだ……多分。

冬木市新都の東側にある、とあるアパート

近代都市開発の波に乗つて建てられたこの大型のアパートは、まだ築二年にも達していない。今回フォックスは、次々とここに入居していく人々の流れに混じつて、その一室を冬木における本拠とは別に用意した、いくつかのアジトの一つとして借り受けていた。戻つたフォックスは、キャスターと詳しい自己紹介と能力の確認を終えると、自身の”事情”と今回の聖杯戦争の知識を明かした。

「……と、いうわけでな。これが俺の前世の記憶で覚えてい、第  
四次聖杯戦争の全てだ」

「…………」

リビングで互いに向かい合う主従一組。

重苦しい空氣の中で話を聞き終えたキャスターは驚愕と混乱に言葉

を失っていた。

……転生者という事実、創作物として描かれた世界、自分たちを呼び出した聖杯の異常とそれによつて起きた災厄。どれも真実だとしたら危険すぎる」とばかりだった。

「もちろん俺の知識とこの世界という“現実”は別のものだ……。俺という異物がまぎれている時点でな。だから聖杯の汚染の話も、違うものであればよかつたんだが……どうやら前世の記憶通りらしい……」

フォックスは令呪が宿つてから、戦いの準備と共に前回の聖杯戦争のことも調べた。前世の記憶から聖杯の汚染が、第三回でアインツベルンが呼び出した反英雄のサーヴァントが原因であることは覚えていたためだが、結果は記憶の通り。調査と共に、他のマスターも原作知識通りであることも判明し、十中八九放つておけば冬木の大災害が再現される可能性が出てきたのだ。

「もちろん聖杯が汚染されているのをこの目で見たわけじゃない。だから俺はこの戦いを通じて調査を進めて、確証をつかむ。その上で聖杯を破壊して、この戦争を解体するつもりだ。だからキャスター……俺に協力して欲しい」

「…………事情はわかりましたご主人様、もちろん協力させていただきます。私の願いは良妻としてご主人様に仕えることだけですからね。

でも危なかつたですね~、たまたま私が聖杯に願うことがなかつたから良かつたようなものの、他のサーヴァントだつたら反旗を翻しましたよきっと」

それについてはフォックスも同意である。

聖杯戦争で呼び出されるサーヴァントの多くは聖杯への願いがある。第五次と四次のランサーのように願いがない例外もいるが、それらは少数派だ。触媒を使わず、相性のいい英靈を狙つて召喚したのはどうやら間違いではなかつたらしい。

……最も後で聞いたところ、召喚したあの神社そのものが彼女の触媒…とまではいかなくとも、キッカケになるぐらいの効力を發揮したらしいが。

「よろしく頼むよキャスター。大体の指針は決まつていてるけど、正直キミの能力の高さを考えると、予定よりも容易に計画を進められそうだ」

「う…フォックスにとって、呼び出したこの魔術師の英靈の能力は、いい意味で誤算だった。

彼女の真名は「玉藻の前」。有名な日本三代化生の白面金毛九尾の狐である。本来は妖怪ではなく、天照大神から分かれた文字通り『神』の眷属であるらしいが、その彼女をサーヴァントとして呼び出せた事実はかなりのイレギュラーだった。

最初キャスターの正体を聞いたとき、フォックスは僅かに不安を感じた。なにしろ第三次聖杯戦争でアインツベルンが神靈クラスの靈を無理やりサーヴァントとして呼び出そうとして失敗し、真っ先にぶち殺されたという事実があつたのだから慌てるのも無理はない。

だが、目の前のサーヴァントには、そんな心配は杞憂で終わりそうだ。もちろん彼女とて本来英靈ではないところをサーヴァントとして召喚されたためかなり弱体化してはいる。尻尾も一本だけだ。

これが神靈や惡靈の類で呼び出されたならさぞかし強力だつただろ  
うが、彼に不満はない。

なにしろ弱体化を差し引いてもキャスターのスペックはかなりのも  
のだ。さすがに肉弾戦のパラメータは低いが、そこはキャスターの  
クラスなのだから仕方ない。だが最も重要な魔力、スキル、宝具の  
力はキャスターのクラスとして見ても極めて高いものだつた。

加えて注目すべき点は、彼女が日本の英靈であるところである。

本来冬木の聖杯が呼び出せるのは西洋の英靈のみ。もちろん第五次  
のアーチャーや侍アサシンのように日本出身の無銘の英靈が呼び出  
されるような例外がないこともないのだが、キャスターの場合は『  
知名度』という点から見ると、この一人とは意味合いが大きく違つ  
てくる。

サーヴァントには”知名度補正”というものがあり、召喚された土  
地で高い知名度をもつサーヴァントには、能力が増大したり、スキ  
ルや宝具が追加されるといった恩恵があるのだ。

そしてキャスターの正体は、日本人なら知らぬものなどまずいない  
であろう”九尾の狐”（実際は違うらしいが）。

加えて日本でも有名な天照大神の一柱である彼女は、おそらく今回  
のサーヴァントの中で最も力を發揮できるだろう。

これなら大幅な計画の前倒しが可能だつと内心喜びながら、フォ  
ックスはキャスターにこれから動きを話し始めた……。

えつ、何？早速千年後の日本料理を食べさせてくれ？仕方がない、たしか『赤いきつね』が台所にあつたな……。うん、きつと喜ぶだろう。

冬木の海浜公園の西側に隣接する倉庫街。

夜になり完全に人気がなくなつた区画の大通りの真ん中で、その男は待つていた。長身にクセのある髪をオールバックにした美貌の顔立ち。その両手には、呪符で巻かれた二本の槍が握られていた。さらには男から発せられる膨大な魔力は、明らかに人のものではない。

その男に近づく二人の人影。片や輝く銀髪に見事な赤の瞳を持つ美貌の白人女性、そしてもう一人は漆黒のダークスースに身を包んだ、金髪碧眼の清純な美少年のような雰囲気を醸し出す少女。……アイリストフィール・フォン・アインツベルンと、彼女の夫、衛宮切嗣のサーヴァント「セイバー」だった。

手持ち無沙汰に”獲物”が来るのを待ち続けていた男は「ようやく

か……」と呟くと、一人に視線を向ける。

「よくぞ来た。今日一日、この街を練り歩いて過いしたものの、どいつもこいつも穴熊を決め込む腰抜けばかり。……俺の誘いに応じた猛者もさかは、お前だけだ」

そう低く朗らかな声で讃える男 ランサーのサーヴァントは、あくまで自然体で田の前のサーヴァントに問う。

「その清澄な鬪氣……セイバーとお見受けしたが、如何に？」

「その通り。そつこつお前はランサーに相違ないな？」

涼やかで…それでいて意思の強い声でセイバーも問い合わせる。

「いかにも。フン、」れより死命おつとこつ相手と尋常に名乗りを交わすこともままならぬとは。興の乗らぬ縛りがあつたものだしこ。

その言葉にセイバーも僅かに表情を弛緩させる。どうやら同意見らしい。

「是非もあるまい。もとより我等自身の栄誉を競う戦いではない。お前じて、この時代の主のためにその槍を捧げたのであらう？」

「ふむ、違いない」

苦笑するランサー。これから殺し合あつをすることは思えない空氣だ。

「我が主に勝利を捧げるべく、」つして好敵手が来るのを待つて、たが、招きに応じたのが最優と名高き剣の英靈とは僥倖くわいこうだった

「ほう、尋常な勝負を所望であつたか。誇り高い英靈と相見えたのは私にとつても幸いだ」

お互いに笑みを浮かべ、戦闘態勢に入る。

ランサーは手に持つ一槍を鳥が翼を広げるよう構え、セイバーもダークスースから愛用の白銀の鎧へと早変わりする。その手には不可視の魔力の風で包まれた、古今東西最も有名な聖剣が握られていた。

「それでは  
ござ」

「うわああああああ～～～つ！！！」

(ビリーハーリーになつたのか……)

未遠川を跨ぐ冬木大橋のアーチ。

地上50mに達するこの場所は、セイバーとランサーの決闘を見守られる好位置のひとつであり、さつきからフォックスは、じいじで悶々と頭を悩ませていた。

原因…… というか事の起こりは数分前。 ランサーの挑発に気付き、 キャスターと共にこうして一人の騎士の戦いを見守っていたのだが、 そこに突如として空から戦車を駆るライダーが、 豪快に雷電をまき

散らしながら「己」がマスターと共に戦いの見物に現れたのだ。

もちろん居合わせたのは単なる偶然で、会った直後には「我が名は征服王イスカンダル！！」「何考えてんだこの馬鹿サー・ヴァント！？」テ「コ・ピン」「余の配下となれ！」というようなやりとりがあつたのだが、今では全員（強風に煽られ、必死にアーチの鉄骨にしがみつくウェイバー除く）でセイバーとランサーの武舞を見物していた。

キャスターは配下となる話は断つたものの、それなりに馬はあったようで、今では普通にライダーと決闘に対する意見を交わしたり、途中コンビニで買った稻荷寿司をつまみとして分けたりしている。まあフォックスにしても、ライダーは原作で一番好きな漢気あふれるキャラなので、キャスターが仲良くやれてるのは嬉しかった。……のだが

「そ、寒い！高い！？死ぬ！死んじゃう！？」

「おいらライダー、アンタのマスターがピンチだぞ。というかさすがにこの高さと強風は彼にはキツイだろう？」

「心配無用だキャスターのマスターよ。我がマスターは余と共に戦場を駆ける勇者なのだからな、これくらいどうつてことないわい！」ガハハハと持ってきたワインを飲みながら大笑するライダー。まあ、仮にも自分のマスターだし、いざとなつたらさすがに助けるだろ（……多分。

そしてフォックスもセイバーとランサーの戦いに目を向ける。それはまさに神話の再現。一人が動くたびに、打ち合つたびに局地

的な台風と地震が巻き起し、周囲に凄まじい爪痕を残していく。文献でしか知らないサー・ヴァント同士の決闘。その中でも白兵戦に特化した剣と槍の英靈の戦いは、生で見るとよりその凄まじさを感じられた。

「むー見ろ皆の衆。エリヤンソンサーが宝具を開放するよ！」だぞ

ライダーの言葉で全員（ウェイバー除く）が槍兵に目を向ける。成程、ランサーの持っている一槍の内長槍の方の呪符が外された。

……………  
エリヤンソンサーは勝負に出るよ！」だ。

## 第五話 王と騎士の戦いにて（前書き）

今回は主人公勢出ません。  
原作の重要な部分なので、外せませんよね。

## 第五話 王と騎士の戦いにて

戦闘開始から数分……既に倉庫街は見るも無残な惨状と成り果てていた。

サーヴァント……文字通り神話級の規格外である彼らの戦いは、戦闘の余波だけでも圧倒的な奔流となつて周囲に爪痕を刻んでいくのだ。

だが、当の本人たちには周りへの被害など構う余裕はない。セイバーは、槍は両手で一本を扱うという大原則を覆して、軽々と両の手で一槍操るランサーの腕前に苦戦し、ランサーは不可視の剣とう、自身の宝具の力と比べても、何とも面倒なセイバーの武器との力量に攻めあぐねていた。

しかし一人の顔に苦渋はない。あるのは、これほどの強敵に巡り合えた事への喜びだけだ。

「名乗りもないままの戦いに名譽も糞もあるまいが

一旦距離を取り、涼し気な表情でランサーは賛辞を送る。

「ともかく、賞賛を受け取れセイバー。ここにいたつて汗一つかかんとは、女だてらに見上げた奴だ」

「無用な謙遜だぞ、ランサー。貴殿の名を知らぬとはいえ、その槍捌きをもってその賛辞……私には誉だ。ありがたく頂戴しよう」

本来セイバーもランサーも、ただ戦いのために招かれた使い魔でしかない。だが、時空を超えた二人の騎士の心には、お互いの素性は

知れずともたしかに通じ合つものが生まれていた。

最早相手にとつて不足なしと互いに武器を掲げ合つ。

『戯合いはそこまでだ。ランサー』

静寂な空氣に突如として冷淡な声が響き渡る。

「ランサーの……マスター！？」

驚きと共にアイリスフィールが周囲を見渡すが、他に人影は見当たらない。声も魔術によつて偽装が施されているらしく、男か女か、そもそもどこから聞こえるのかさえ判別できない。

『これ以上勝負を長引かせるな。そのセイバーは難敵だ。速やかに始末しろ。 宝具の開帳を許す』

「了解した。我が主よ」

マスターへの返答と共に急激に殺氣を研ぎ澄ませるランサー。そしてそれまでの構えを改めると、何とランサーは左手の短槍を”放り捨てた”。

その行動に驚きつつも、セイバーは右手の長槍がランサーの宝具かと凝視する。

果たしてその予想は正しく、長槍に巻かれた呪符が剥がれてゆく。現れたのは、穂先から柄まで朱色に染められた深紅の槍だった。その穂先からは、先ほどとは比べ物にならない……視覚からも確認できるほど禍々しい魔力が揺らめいている。

「 そういうわけだ。ここからは殺りに行かせてもらひつ」と

そう低く呟くと、ランサーは先程までの鳥のような独特の構えとは違う……セイバーにも見慣れた両手での槍の構えを取つた。同時にセイバーも構えを改め、先程以上にランサーの動きと槍に注意を向ける。果たしてあの槍の、宝具としての効果はどんなものか……。

宝具の効果の発揮の仕方は大きく分けて二つ。セイバーの持つ約束クスカリバされた勝利の剣のように真名開放と共に爆発的な威力を発揮するタイプ。

そしてもう一つは、武器自体に宝具としての能力が付加されたタイプ。それは一撃必殺としての威力には欠けるが、常に効果を発揮し続けることによって戦闘を優位に進めることができる。セイバーの宝剣を覆う風王結界インビシブル・エアが正にそれだ。

そしてセイバーの見立てでは、ランサーのあの槍はおそらく後者。次で決めるという気迫が感じられない以上、引き続き戦闘を続行してこちらを仕留める腹づもりだろう。

先に仕掛けたのは……やはりランサーだ。

二槍の時とは違う、正道の槍術にのつとつた突き。いつそ愚直なものその突進をセイバーは苦もなくいなす。……が、異常が起きたのはその時だった。

「 なー? 」

驚愕の声を上げたのはセイバー。それもそのはず、何と槍の穂先が剣に触れた瞬間、纏つていた風が剥がされ、宝剣の姿があらわにな

つたのだ。

「晒したな。秘蔵の剣を」

「……」

ニヤリと笑うランサーと解せないと沈黙するセイバー。一体今の攻防で何が起きた？

「刃渡りも確かに見て取った。これでもう、見えぬ間合いで惑わされることもない」

宣言と共にランサーは、先程とは比べ物にならない勢いで次々と突きを繰り出す。それは一つ一つが最速の英靈の名に恥じぬ速さと鋭さを持っていた。

セイバーも自らの獲物で槍を捌ぐが、徐々にその表情に焦りが浮かんでくる。理由は不明だが、あの深紅の槍と打ち合つたびに風王結界インビジブル<sup>・ニア</sup>が乱れ、自身の剣の姿が暴かれていくのだ。

だが、この程度でひるむことはない。今敵が使っているのは見慣れた順当な槍術。応じようはいくらでもあるし、何よりセイバーは気付いている。ランサーの突きの嵐の中に、比較的浅いものが混じっていることを。

これならば自身の鎧で十分防げると判断しながら、遂にセイバーは、袈裟懸けにカウンターの一撃を繰り出す。

次の瞬間血飛沫が舞つた。

ダメージを負つたのはセイバーだった。咄嗟に類い稀な“直感”が叫んだ警鐘に従い、身を捻つたがそれで正解だった。ランサーの槍は、セイバーの鎧の防御をまるで無いかのように貫いたのだ。

ゴロゴロと地面を転がりながら距離を取り、立ち上るとすぐさま構えを取る。その脇腹には、浅いが槍に抉られた傷が血を滴らせていた。

「セイバー！」

アイリスフィールは負傷を判断すると、すぐさまセイバーに治癒魔術をかける。

「…………ありがとうございますアイリスフィール。大丈夫、治癒は効いています」

そう言いながらもセイバーは脇腹を抑える。どうやら痛み自体はまだ残つているようだ。

「やはり、易々と勝ちを獲らせてはくれんか……」

そう言いながらも、獲物を仕留め損ねたランサーの顔に苦渋の色はない。むしろ良くよけたと喜悦の表情を浮かべている。

そして、咄嗟に『直感』のスキルで致命傷を避けたセイバーは、ひ

とつの答えにたどり着いていた。

……あの赤い槍の能力は、おそらく「魔力の破壊」。

それならば、先程風王結界インビシブル・エアを無効化されたことも、自身の鎧が苦もなく貫かれたのも、納得がいく。どちらも魔力で編まれた存在である以上、魔力を打ち消す武器とあたれば、一方的に負けるのが道理だ。

どうやら打ち消すことが出来るのは穂先に触れたその瞬間に限定されようだが、それでもかなり厄介な能力だ。

サーヴァントの戦いに魔力無しでの戦いというのはありえない。個々の魔力量が戦闘に重大な影響をもたらす聖杯戦争では、極めて有用性の高い宝具だろう。特に魔術師のクラスには天敵と言える能力だ。

だが、敵の脅威に対するセイバーの判断は一瞬だった。すぐに纏つていた鎧を散らす。

その行動にランサーもアイリスファイールも怪訝な表情を見せるが、セイバーの取つた構えで即座に理解が及ぶ。

「防ぎ得ぬ槍ならば、防ぐより先に斬るまでのこと。覚悟してもらおう。ランサー」

鎧を外した軽装の姿でセイバーの取つた構えは低く下段……剣も後ろに下げた一撃必殺の構え。

捨て身とも言い換えるその姿に、全員がセイバーが次で決めるこ

とを確信する。

ランサーの槍の前では魔力の鎧など無力。……ならば鎧を編む分の全魔力を、自身のスキルのひとつ『魔力放出』による身体強化に転換したほうがいいというのがセイバーの判断だった。

「その勇敢さ。潔い決断。決して嫌いではないが……この場に限つて言わせてもらえば、それは失策だつたぞ。セイバー」

「さてどうだか。諫言は、次の打ち込みを受けてからにしてもらおうか」

ランサーの挑発に不敵に返すセイバー。

互いに必殺を確信したその瞬間、僅かに足の運びが鈍つたランサーにセイバーが猛烈に仕掛けた。

『魔力放出』によつて、弾丸のようになり迫るセイバーに対してランサーが行つたのは……”足”だった。

咄嗟に蹴り上げられる一本の棒……。それは先程ランサーが放り捨てた短槍だった。いつの間にか呪符が解かれ、黄色い地金を曝け出していた”それ”は、既に停止不可能な速度に達したセイバーの喉元に、その切つ先を向けていた。

再び舞う血飛沫……。

互いに傷を負つた両者は再び距離をとり、自身の状態を確認する。あの瞬間セイバーは、何とか身を捻つて串刺しは避けたものの、完全には回避しきれず、左腕に短槍による傷を負つた。

そしてランサーも、セイバーが態勢を崩したことによつて必殺とまではいかなくとも、左腕に宝剣による一撃を受けた。

両者共に浅い一撃。戦闘続行に支障はない。

そしてランサーの傷は、巻き戻しの如く高速で塞がつていいく。未だに姿を見せない……彼のマスターが治癒を施したのだろう。その顔には壮絶な笑みが浮かんでいる。

対照的にセイバーの表情は苦い。アイリスフィールがいくら治癒魔術をかけても左腕の傷が治らないのだ。

「我が『破魔の紅薔薇』<sup>ゲイ・ジャルグ</sup>を前にして、鎧が無為だと悟つたまでは良かったな。が、鎧を捨てたのは早計だった。そうでなければ『必滅の黄薔薇』<sup>イ・ボウ</sup>は防げたものを」

最早隠すこともないとランサーは堂々と宝具の真名を明かす。そして次に見せた構えは、戦闘の開始時と同じ……彼が生涯をかけて修得した我流の一槍流の構えだった。

魔力を打ち消す赤の槍と決して癒さぬ傷を負わせる黄槍。ここまで  
くれば断定は容易い。セイバーのアーサー王伝説とも関わりがある、  
ケルト神話に綴られるその英雄の名は……。

「成る程、もつと早くに気付くべきだった……。フィオナ騎士団、  
随一の戦士……“輝く貌”のデイルムッド・オディナ。まさか手合  
わせの巣に『』るとは思いませんでした」

「何、誉れ高いのは俺の方だ、セイバー。かの名高き騎士王と鎧競  
り合つて、一矢報いるまでに至つたとは フフン、どうやらこの  
俺も捨てたものではないらしい」

真名を知られてもランサーの表情は清々しいものだった。お互いの  
名が分かつた今、ようやく騎士として尋常な勝負が始めることがで  
きる。

だが対照的にセイバーは内心で歯噛みせざるを得なかつた。左に受  
けた治癒不可能の傷……それほど深くはないが、おそらく腱をやら  
れたのだろう、左手の親指が全く動かない。

これでは彼女の最大の切り札である約束された勝利の剣を放てない。  
両手で満足に剣を握られなければ、発動の反動に耐え切れないから  
だ。

” ただの一刺が、高くついた…… ”

だが、セイバーの闘志には微塵の揺るぎもない。  
むしろ緒戦でこれだけの強敵と対峙したこと、益々の昂りを見せ  
ている。

そしてその思いは、ランサーにもしっかりと伝わっていた。セイバー同様、生糸の騎士であるランサーも、この状況でなお全く戦意の衰えないセイバーに畏敬と歓喜を感じているのだ。

「覚悟しろセイバー。次こそは獲る」

「それは私に獲られなかつた時の話だぞ。ランサー」

互いに壮絶な笑みを浮かべ、間合いを詰める。機を伺い合つことで生まれた静寂は、冷たく緊迫した空気を作り出していたが、突如としてそこに雷鳴が響く。

何事か、と二人が振り向いた先に”それ”はいた。

形だけで言つなら、それは”戦車”だった。二頭の逞しくも美しい牡牛に牽かれた戦車<sup>チャリオット</sup>が、紫電をスパークさせながら空を駆つてくる。

蹄と車輪が空中を蹴るたびに大気が震える……。これほどの圧力は、宝具以外にありえない。

そして雷電を纏つた戦車は、セイバーとランサーの間に降り立つた。ちょうど、二人が対峙する距離の中間地点である。着地と同時に雷が收まり、御者台に乗る巨漢の姿があらわになつた。

「双方、武器を收めよ。王の御前である！」

突如響く大音量。戦車を駆つていたのだろうその男から発せられた声は物理的な圧力をも伴い、周囲に響き渡る。だがセイバーもランサーも名にし負う兵<sup>つわもの</sup>、この程度で怯みはしない。二人とも油断なく自身の前に降り立つた偉丈夫を見据える。

「我が名は征服王イスカンダル。此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界した」

……瞬間、再び空気が静寂に満ちた。

## 第六話 集結する緒戦にて（前書き）

金ぴかと黒騎士登場です。中々主人公たちを活躍させられません（汗）。次話ではちやんと戦うのぞよろしくお願いします。

## 第六話 集結する緒戦にて

フォックスは闇夜を駆けていた。ヒーリング・ファクター 肉体再生能力と身体強化魔術による相乗効果で強化された肉体で、次々と建物の間を車が平地を走るのと何ら変わらない速度で駆け抜ける。目的地はセイバーとランサーのいる倉庫街だ。

あの時、突如ライダーは「こりやいかん！」のままではどちらかが脱落してしまう！－すまんが先に行ってるぞ！－と叫ぶと、一瞬で最早涙目となつていていたウェイバーを戦車に乗せてさつさと決闘の場に向かってしまった。おそらく原作通りに二人の勧誘を行うのだろう。そして彼も自身のサーヴァントを背中に背負い、戦場へと向かっていた。

「もあー、征服王もせっかちですね。せっかくだから私たちも乗せて欲しかつたです。あ、でも今こうしてご主人様におぶつてもらつてますし、どうこいどつこいかな～？」

「まあ、次にあつた時に頼めばいいさ。あとキャスター、首によだれを垂らすのはやめてくれ」

「はー？すみません。つい至福の状況に酔つてしましました！」

「着くまでには醒ましておいてくれよ。つとーそろそろだな」

マスターの言葉にキャスターは意識を研ぎ澄ませた。成程、ここで来るとサーヴァントの魔力の気配がより強く感じられる。それを確認すると、キャスターも背中から降りて、全力でフォックスに合わせて併走を始める。

そして着いた先では、勧誘が失敗し心底残念そうにする「ライダー」と、再び真名を明かした自らのサーヴァントを必死に責めるウェイバー。ところ、平時なら何とも和む光景があった。そして到着と同時に三人のサーヴァントの意識がフォックスとキャスターに向けられる。

「おつキャスターとそのマスターか、遅かったではないか」

「アンタと違つてこつちは徒歩だから仕方ないだろ。しかし、その分だとやつぱり交渉は上手くいかなかつたみたいだな」

「ウ～ム残念ながらのう。どうだセイバー、ランサー？ 改めて訊くが余と共に世界を征する氣はないか？」

「断る！ 私も王のひとりだ。臣下に下る氣など毛頭ない！」

「俺もだぞライダー。この時代で我が槍を捧げるのは、我がマスター以外にありえん。それにこちらからも質問がある。貴様何故そこのサーヴァントのマスターと親しげに話している？」

「ん？ ああ、そこのキャスターにはここに来る途中で会つて、臣下になるよう誘つたんだが断られてしまつてな。だが美味しい”イナリズシ”とやらを」馳走してもらつたわい。しつかしこりやあ完全に交渉は決裂か。勿体ないなあ。残念だなあ」

「だからやめとけって言つただろライダー！ あの一人ならきっと騎士として余の威厳に感じ入り、下るわい」とか言つときながら、結局総スカンじやないかよ！ 大体なんでお前は会つたびに真名バラすんだよ！ アレか？ お前はいちいち名乗りを挙げなきや生きていけないのかー？」

「いや、まあ、”ものは試し”と言つではないか」

「ものは試しで真名バラすんかい！？」

ギヤーギヤーと泣きじゃくるウエイバーと、それを適当に受け流すライダー。見てて哀れを誘うその光景は、キヤスターという新たなサーヴァントが出てきたとこのうに場に全く緊張感を生み出さない。

『わうか、よりもよつて貴様か』

そこに突如として低く 地を這うような怨嗟に満ちた声が響き渡り、再び空気が凍りついた。未だ姿を見せない、ランサーのマスターである。

その声には、先程のランサーへの命令の時とは違う……明らかに憎悪の念が込められている。

『いつたい何を血迷つて私の聖遺物を盗み出したのかと思つてみれば よりにもよつて、君自らが聖杯戦争に参加する腹だつたとはねえ。ウェイバー・ベルベット君』

忌々しげに名を呼ばれたウェイバーは、声の主が誰なのかを理解し震え上がつた。

そして原作を知るフォックスも、この声の正体を悟り警戒を強める。魔術の最高学府 時計塔の筆頭講師にして、今回のマスターの中でも”魔術師”として最高の実力を有する男 ケイネス・エルメロイ・アーチボルトだ。

『残念だ。実に残念だなあ。可愛い教え子には幸せになつてもらい  
たかつたんだがね。ウェイバー、君のような凡才は、凡才なりに凡  
庸で平和な人生を手に入れられるはずだつたのにねえ』

嘲りと侮蔑を多分に含んだ声にウェイバーは何も言い返せない。自  
分はこの高慢な講師を見返すために聖杯戦争に参加したのに……初  
めて自身に向けられた明確な殺意で恐怖に身を竦ませてしまつ。

『致し方ないなあウェイバー君。君については、私が特別に課外授業  
を受け持つてあげようではないか。魔術師同士が殺し合うという本  
当の意味……その恐怖と苦痛とを、余すところなく教えてあげる  
よ。光栄に思いたまえ』

余りにも傲慢な発言。だが当のウェイバーには何かする余裕はない。  
魔術師の”死の宣告”というものを初めて体験したウェイバーには、  
ただ恐怖にうち震えることしかできなかつた。……が、突如彼の肩  
を大きな何かが包み込む。…………ライダーの手だつた。

「おう、魔術師よ。察するに、貴様はこの坊主に成り代わつて余の  
マスターとなる腹だつたらしいが、だとしたら片腹痛いのう。余の  
マスターとなるべき男は、余と共に戦場を馳せる勇者でなければな  
らぬ。姿を晒す度胸さえない臆病者なぞ、役者不足も甚だしいぞ」

『……』

ライダーの大笑にケインズは答えない。……が、姿の見えぬ彼から  
発せられる怒りの波動だけは、沈黙が降りる中でも十分感じられた。  
「おいらー他にもまだあるだろ？が。闇にまぎれて覗き見をして  
おる連中はー」

その発言にフォックスを除いた全員がライダーに怪訝な表情を向けた。解せないとばかりにセイバーが問いかける。

「 どうこいつことだ？ ライダー」

「セイバー、それにランサーよ。うぬらの真つ向切つての競い合い、真に見事であった。あれほど清澄な剣戟を響かせては、惹かれて出てきた英靈が、よもや余たちだけということはあるまい」

どうやらライダーの発言は、未だに姿を見せない……残りのサーヴァントに向けてのものらしい。辺り一面に豪快な宣言が響き渡る。

「情けない。情けないのう！ 冬木に集つた英雄豪傑どもよ。このセイバーとランサーが見せ付けた氣概に、何も感じるとこるがないと抜かすか？ 誇るべき真名を持ち合わせておきながら、コソコソと覗き見に徹するといつのなら、腰抜けだわな。英靈が聞いて呆れるわなあ。んん！？」

そしてひとしきりに豪笑を終えると、仕上げとばかりにライダーは周囲の闇に向かつて堂々と宣言する。

「聖杯に招かれし英靈は、今！ ここに集うがいい。なおも顔見せを怖じるような臆病者は、征服王イスカンダルの侮蔑を免れぬものと知れ！」

果たして、その英靈は現れた。

ライダーの大熱弁の直後に現界した おそらく挑発に乗つてやつてきたサーヴァントだろう。街頭のポールの上から見下すような形で戦場を見渡している。全身を覆う黄金の甲冑を抜きにしても放たれる絶対的な存在感は、ただのサーヴァントとは明らかに一味も二味も違う風格を漂わせている。

そして全員が気付く。あれは先日遠坂邸でアサシンを一方的に屠った謎のサーヴァントだ……。この場にいる四人のサーヴァントのクラスと、明らかに狂つてない様子から、間違いなく該当するクラスはアーチャーだろう。

「<sup>オレ</sup>我を差し置いて”王”を称する不埒者が、一夜のうちに一匹も涌くとはな」

そう切り出した黄金の英靈は、侮蔑と不快さを全く隠さずに眼下のサーヴァントを見渡す。その正体は、先の発言からするに、おそらくセイバーやライダーと同じ”王”の英靈なのだろうが、口調には二人には無い……冷酷で無慈悲なものが混じっている。

そして真名を知っているフォックスは、その姿に最大限の警戒を続ける。

アーチャーのサーヴァント ”英雄王ギルガメッシュ”。今回の聖杯戦争で間違いなく彼にとつて、最大の障害となる最強のサーヴァントだ。

それから難癖を付けたライダーと問答を始めたアーチャーだったが、突如として目線を別方向に向けた。

いや、アーチャーだけではない。その場にいたマスターとサーヴァント全てが、同じ方向を見る。その先には全身を傷だらけのフルブレートの鎧で固め、底なしの闇色の”影”のようなもので覆われた黒騎士が立っていた。禍々しいまでに発せられるその魔力は、明らかにサーヴァントだ。

そして本能的にわかる。……あれは文字通り血に飢えた狂戦士のクラス　バーサーカーのサーヴァントだ。全身から漂う負の波動は、明らかに他のサーヴァントとは比較にならない……まるで殺意が人の形をとつていてるような錯覚さえ覚える。

「……なあ征服王。アイツには誘いをかけんのか？」

軽飄にライダーを揶揄するランサーだが、目は笑ってない。むしろこれまで最大の警戒を、黒騎士に向いている。

「誘おうにもなあ。ありやあ、のつけから交渉の余地なさそうだわなあ」

先程までに比べて明らかに積極性に欠ける発言だが、全員がライダーと同意見だった。……そもそも”アレ”に言葉は通じまい。

下手なことをすれば飛びかかってきそうだ。

「で、坊主よ。サーヴァントとしてはどの程度のモンだ？あれは

聖杯戦争では、正規のマスターにはサーヴァントを見ることで対象のステータスを読み取る特殊能力が与えられる。ライダーのマスターであるウェイバーも、例に漏れずその能力を持つており、既にここまでアサシンと目の前のバーサーカーを除いた全てのサーヴァ

ントのステータスを把握していた。……が、彼はライダーの問い合わせに答えられなかつた。

「……判らない。まるつきり判らない」

「なんだあ？ 貴様とてマスターの端くれであろうが。得手だの不得手だの、色々と”観える”ものなんだろ、ええ？」

「いや、ウエイバーの言つとおりだ」

ライダーの問いに答えたのは、この場にいるもう一人の正規のマスターであるフォックスだつた。

「あのサーヴァントのステータスが”見えない”。恐らくアレを覆つている黒い影……あれが透視能力を阻害しているみたいだ」

フォックスの言葉に全員が改めて黒騎士に目を向ける。……成程、その全身を覆う霧状の影は、そもそもあのサーヴァントの姿を正確に捉えることさえ不鮮明にさせている。スキルか宝具かはわからないうが、恐らく自身を隠蔽する能力だらう。

突如登場したこの異様な狂戦士に、全員が警戒を緩めないが、ひとりだけ例外がいた。　　アーチャーである。

理由はわからないが、あの黒騎士は、乗り込んできた時から自身に狙いを定めていることに、この黄金の王は気付いていた。

「誰の許しを得て我を見ておる？この狂犬めが……」

理性も無い獣ケダモノが、不快な視線を自分に向けている。プライドの塊で

あるアーチャーからすれば、それは許し難い侮辱であった。

「せめて散り様で我オレを興じさせよ。雑種」

断罪の宣言と共にアーチャーの左右に宝剣と宝槍が浮かぶ。発せられる膨大な魔力は、間違いなく宝具のそれだ。

そして切つ先バーサーカーが標的に向けられると、剣と槍は猛烈な速度で射出された。その狙いは弓兵とは思えないほど大雑把だが、何せ一本とも宝具である。それらは着弾と同時にミサイルが命中したかの如き破壊をもたらした。

「……ツ！」

誰かが息を呑む。巻き上げられた粉塵が晴れてくると、その人影はあつた。

バーサーカーは健在だった。その手には打ち出されたハズの宝剣が握られ、僅かに逸れた足元には宝槍が作ったクレーターが出来上がっている。

恐らく今起きたことが理解できたのは、サーヴァント以外にはフォックスだけだろう。先の攻防でバーサーカーは、まず第一射の宝剣を”手で掴み取り”、続けて飛来する宝槍をその剣で打ち払ったのだ。

「……奴め、本当にバーサーカーか？」

「狂化して理性を無くしてゐにしては、えらく芸達者な奴よのう」

ランサーとライダーが唸るが無理もない。神速で飛来する宝具を掴み取り、それを即座に使いこなして間髪いれずに迎撃に使用するなど、とても狂戦士のクラスとは思えない。

だが、宝具を打ち出した当のアーチャーは、顔を怒りに染めていた。自身の宝具を奪い取り、今もなお立っているバーサーカーの姿に憤怒を浮かせている。

「………… その汚らわしい手で、我の宝物に触れるとは………… そこまで死に急ぐか、**狗ツ**！」

怒号と共に再びアーチャーの周りに宝具の群れが現れた。………… その数、十六挺。

剣、槍、斧、槌、矛と、それら全てが紛れもない”宝具”だった。

「そんな、馬鹿な…………」

思わず声を漏らしたウェイバーだったが、他の者も内心は同じだろう。本来宝具はひとりの英靈に一つか二つ、多くて三つか四つが限度だ。切り札とも言える宝具をあれだけ所有し、なおかつなんの未練もなく放つていくなど異常としか言えない。

「その小瀆な手癖の悪さでもって、どこまで凌ぎ切れるか………… あ、見せてみよ！」

号令一下………… それぞれが膨大な神秘を有する宝具の大群が怒涛の如くバーサーカーに殺到した。一発一発が必殺の威力を持つ宝具の嵐は、倉庫街に莫大な破壊をもたらしていく。

だが、一切の容赦の無い爆撃の中でもバーサーカーは倒れない。何とバーサーカーは、最初と同様に飛来した矛を左手で掴み取ると、右手の剣と合わせて襲い来る宝具の一斉射撃を片つ端から撃ち落としているのだ。たった今奪い取った武器をまるで自分の体の一部のように使いこなすその腕は、正に神業としか言えないものだった。

「…………どうやらあの金色は宝具の数が自慢らしいが、だとするとあの黒いヤツとの相性は最悪だな」

壁面している者たちの中で、ひとりライダーが余裕そうに弦く。

「黒いのは武器を拾えば拾うだけ強くなる。金色も、ああも節操なく投げまくつていては深みに嵌る一方だらう。融通の利かぬ奴よのう」

ライダーの指摘の通り、バーサーカーはより強力な宝具が飛来するとそれを敏く奪い取り、迎撃に使用していた。そして遂にアーチャーの攻撃を凌ぎきつたバーサーカーは、両手の曲刀と斧をアーチャーに掛けて投擲した。

切り裂いたのは、アーチャーの立っていた街頭のポールだった。足場を無くしたアーチャーは難なく着地するが、その顔には先程以上の憤怒が浮かんでいる。

「痴れ者が……。天に仰ぎ見るべき<sup>オレ</sup>の我を、同じ大地に立たせるかッ」

怒号一喝　　黄金の王の後ろの空間が再び歪み始める。

「その不敬は万死に値する。そこな雑種よ、もはや肉片一つ残さぬ

ぞ！」

元々逆立つたアーチャーの金髪が、さらに怒髪天を突くかの如く燃え上がる。そして現れた宝具の数は三十一以上……先程の倍以上の数だ。最早手加減する気は失せたらしい。

あまりの異様な光景に全員が息を呑むが、不意にアーチャーの視線が町の方へ向けられた。

「貴様」ときの諫言で、王たる我の怒りを鎮めると?大きく出たな、<sup>オレ</sup>時臣……」

忌々しそうに舌打ちすると、展開されていた宝具が一斉に消える。どうやらマスターである遠坂時臣から帰還命令が出たらしい。既に殺意も失せたようだが、黄金の王はその傲岸さを隠さずに他のサーヴァントを見据える。

「雑種ども。次までに有象無象を間引いておけ。我<sup>オレ</sup>と見えるのは眞の英雄のみで良い」

そう言い放つと、アーチャーは靈体化して引き上げていった。

「フムン。どうやらアレのマスターは、アーチャー自身ほど剛毅な質<sup>タチ</sup>ではなかつたようだな」

苦笑するライダーだが、事態は好転していない。アーチャーは去つても、もうひとつの脅威　　バーサーカーは健在なのだ。

そして当のバーサーカーは、突然獲物が去つたことで暫く所在無さげだったが、次なる標的を見定め猛烈な殺氣を撒き散らし始めた。

その視線の先には セイバー。

「 a<sup>ア</sup>  
r<sup>ア</sup>  
u<sup>ア</sup>  
r<sup>ア</sup> ツ！！」

新たなる そして最高の標的を見つけた狂戦士は、猛然と騎士の王へと襲いかかった。

## 第七話 混迷と終戦にて（前書き）

第七話です。  
港場での戦い、決着です。

## 第七話 混迷と終戦にて

「…………ツ！」

黒のバーサーカーは、怨嗟の咆哮をあげながら怒涛の如き勢いでセイバーに迫った。

慌てずにバーサーカーの攻撃を受け止めたセイバーだったが、その”得物”の姿を見て驚愕する。

「なん……だと？」

バーサーカーが持っていたのは、”鉄柱”だった。先程のアーチャーの足場だつたポールの一部 一メートル程の長さのそれを槍のよう構えて猛烈な連撃を繰り出してくる。

さうに驚愕はそれだけでは終わらない。バーサーカーに握られたその鉄塊が、黒く染まつていく……。鎧の籠手から蜘蛛の巣状に伸びていくそれは、バーサーカーの魔力だろつ……。闇色に染められた”槍モドキ”は、セイバーの宝剣とも打ち合える程にその強度を増している。

「…………そういうことか。あの黒いのが掴んだものは、何であれヤツの宝具になるわけか」

ライダーの呟きに残りの全員が確信する。先程のアーチャーとの攻防のタネはこれだったのだ。

手にしたもの自身の宝具として扱う能力。それが他者の道具であれ、そこらの鉄屑であれ武器と見なしたものなら宝具にでき

る。使い手の技量が大きく作用するだろうが、それでも規格外とか言えない能力だ。

そして戦いを見守っていたフォックスも、バーサーカーの凄まじさを肌で感じていた。いくら原作で能力を知っていても、生で見なければその脅威を真に理解することは出来なかつただろう。

「ご、ご主人様……リアルガンダールヴです」

「いや、今明らかにメタ発言かます雰囲気じゃないから。ていうかどこで仕入れたそのネタ」

恐れおののきながら、場違いな事をぬかす使い魔を叱るフォックスだつたが、状況は目に見えて切迫していく。

バーサーカーの猛攻を受けるセイバーは防戦一方。ただでさえ狂化したバーサーカーの脅力はセイバーを上回っている上、その武芸は理性を無くしているとは思えない冴えがある。さらに悪いことに先のランサーの必滅の黄薔薇による治癒不可能の傷がセイバーに全力を出すことを許さない。

徐々に劣勢に追い込まれていく。

「貴様は……一体！？」

思わずセイバーが問いかけるが、返答は攻撃だつた。渾身の力を込めて振りおろされた一撃が、セイバーを叩き潰さんと迫るが、突如として舞つた赤い流星がバーサーカーの疑似宝具を両断する。

「悪ふざけはその程度にしておいてもらおうか。バーサーカー」

呆気に取られるセイバーの前には、彼女を庇つたランサーがいた。

右手の長槍 『ガイ・ジャルグ 破魔の紅薔薇』 の切つ先をバーサーカーに向けて対峙している。

……成程、触れたものの魔力を打ち消す『破魔の紅薔薇』なら、バーサーカーの魔力で強化された疑似宝具には天敵だろう。打ち合えば、先のように一方的に破壊されるのが道理だ。

「そここのセイバーには、この俺と先約があつてな。……これ以上つまりん茶々を入れるつもりなら、俺とて黙つてはおらんぞ？」

「ランサー……」

ランサーの宣言にセイバーは感極まるものがあった。彼女はこの聖杯戦争に参加した時から、自身の誇りにそぐわぬ戦いも覚悟している。だが目の前の槍の英靈は間違いなく自分と同じ ”騎士道” を貫いていた。

『何をしているランサー？セイバーを倒すなら、今こそが好機であろう』

不興の声はランサーのマスターのものだつた。どうやらセイバーを打倒するチャンスだと判断したらしい。

「セイバーはーこの『ディルムッド・オティナ』が誇りに懸けて討ち果たします！」

珍しく主人の命令に異を唱えるランサー。やはり騎士である彼としては、セイバーとは正々堂々と決着をつけたいのだろう。

「お望みならば、そこな狂犬めも先に仕留めて御覧に入れましょ。故にどうか、我が主よーこの私とセイバーとの決着だけは尋常に…」

…

『ならぬ。ランサー、バーサーカーを援護してセイバーを殺せ。令呪を持つて命ずる』

瞬間 空気が凍りついた。

令呪。マスターたちが持つ、三回しか行使できないサーヴァントへの絶対命令権。そのひとつが今使用された。

ぐるりと反転したランサーは、令呪の効果に従いセイバーに槍を振る。既に自由意思を奪われた彼には選択の余地はない。その顔は怒りと屈辱に染まりきっていた。

咄嗟に飛び退いたセイバーだが、状況は目に見えて不利だ。ランサーの実力は先の攻防でこの場の誰よりも知っているし、敵は彼だけではない。バーサーカーもいる。

……案の定、バーサーカーはランサーに両断され一メートル程の長さになつた鉄柱を今度は剣のように構え、挑みかかってきた。傍らには共闘を命じられたランサーもいるが、彼には目もくれずに襲いかかってくる。どうやらこの期に及んでも、標的はセイバーのみであるらしい。

完全に進退極まった状況にセイバーは焦燥する。強力なサーヴァントが一体……しかも左手が封じられている今の自分では勝機など微塵もない。

「アイリスフィール、この場は私が食い止めます。その隙に」

既にセイバーは撤退を選んでいた。ここに至っては、自分に出来ることはアイリスフィールを逃すことだけだ。何としても彼女だけは守らなければならない。

「その隙に、せめて貴女だけでも離脱してください。出来る限り遠く「キャスターッ！」ツ！？」

突如セイバーの声を遮つたのは、フォックスだった。

「了解です、ご主人様！炎天よ、走れ！！」

主人の命に答えるキャスター。すぐさま懷から一枚の呪符を取り出し、標的へと飛ばす。呪符は彼女の手から離れると、瞬く間に巨大な炎の渦へと変わり、猛烈な唸りをあげて標的ランサーとバーサーカーへと迫る。

咄嗟にランサーは右手の破魔の紅薔薇ゲイ・ジャルグで炎を打ち消したが、対魔力も低くセイバーに集中していたバーサーカーは振り向くことも出来ず直撃を食らつた。全身を高熱に包まれながら、数十メートル先まで吹っ飛んでいく。

「どういづつもりだ？キャスター……」

主からの命令を遮られた形のランサーだったが、その声に憎々しげなモノはない。あるのは、ただ解せないという疑問だけだ。

「いえ、セイバーがやられたら次は私ですからね 及ばずながら援

護をさせていただきました」

その返答にランサーは成程と納得する。今でこそセイバーを二人がかりで追い詰めているが、もしセイバーが倒されたら次に狙われる可能性が一番高いのは、間違いなくキャスターだろう。元々キャスターのクラスは前線での戦いには向いていない。少なくとも自分のマスターなら嬉々として命じそつだとランサーは考えをまとめる。

「そういうわけでセイバー、一時共闘させてもいいつで」

「し……しかし……」

返答の歯切れが悪いセイバーだが、無理もない。理屈は分かつたが、果たしてキャスターがランサーを抑えられるのか疑わしいのだろう。ただでさえ三騎士のひとりであるランサーは、自分ほどでなくとも高い対魔力をそなえているし、彼の宝具 破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）は、魔術師にとつては天敵と言える武器だ。下手をすれば瞬殺されるかもしない……。

「気持ちはあるが、じつちを気にする余裕はないよつだぞ」

「なつ、グツ！？」

「～～～～～～～～～～！」

咄嗟に反応したセイバーの先には、炎に吹き飛ばされたハズのバーサーカーがいた。どうやら既に復活していらっしゃい。その鎧は、先程とは違ひ炎で煤だらけだったが、全身から滲み出る殺気にはいさかの衰えもない。

「クッ！わかりました、頼みますーー！」

最早自分に選択肢はないとセイバーは黒騎士に向かう。こうなればキヤスターを信じるしかない。

「それでは、相手をしてもらひラランサー

「何？」

今度こそランサーは驚きの声をあげた。いや、彼だけではない。戦況を見守っていた他のマスター やサー、ヴァント全員が驚きの表情をしている。

そもそものはず、宣戦布告したフォックスが懐から一本の剣を抜きランサーに対峙しているのだ。……まるで、これから戦うかのように。

「正氣か？貴様」

ランサーが疑問の声をあげるが当然だった。サー、ヴァントに人間の魔術師が挑むなど自殺行為としか思えない。

「何、ウチのサー、ヴァントは喧嘩手でな。斬り合には俺の担当だ」

「ほう、面白い」

軽飄に返すランサーだが、既に表情に油断はない。

目の前のマスターは恐らく本気だ。……どの程度の実力かは不明だが、今自分が叩きつけた殺氣を難なく受け流したところを見ると、

少なくとも雑魚ではない。すぐに構えを取り、同時にフォックスも戦闘態勢に移行する。

「さて いくか

ウェイバー・ベルベットは頭痛を堪えていた。とは言つても、彼は生来の頭痛持ちでもなければ、病を患つてゐるわけでもない。原因は隣にいるサーヴァント キャスターだった。

あの後ライダーは、四人の戦いを観戦すべく神威<sup>ゴルディアス・ホイール</sup>の車輪で空に上がろうとしたのだが、何を血迷つたのか、この半獣のサーヴァントは『主人の勇姿を特等席で見守る』とか言い出して自分も御車台に乗り込んできたのだ。さらにあるつことかライダーもそれを快く了承し（稻荷寿司の礼だとか）、今ではこうして三人で観戦をする形となつていた。

そして戦いが始まると、キャスターはどこからか取り出した扇を両手に持ち『頑張れ！』<sup>マスター</sup>『主人様！』<sup>ご</sup>とチアガールのように必死に主人の激励をしていた。

橋の上では氣にする余裕がなかつたが、改めて考へると、本来なら殺し合うべき敵のサーヴァントが隣で自身のサーヴァントと一緒に呑気に応援をしているという、このあまりにも常軌を逸した状況にウェイバーは頭痛に加え、胃痛も感じ始めていた。だがここで倒れたとしても彼を責めるものは決していないだろう。よく見れば、アリスフィールも時々こつちを見ては氣の毒そうな表情をしている。

「……なあキヤスター、お前こんなところで応援なんかしてていいのか?……せめて魔術で援護射撃ぐらいしたらどうだ?」

「馬鹿ですねアナタ 対魔力持ちで、ついでに魔力を消す槍持つてるランサーに私が出来ることなんてないですよ」

「その通りだぞ坊主。しつかしサーヴァントと真っ向から白兵戦とは、実に剛毅なマスターではないかキヤスターよ」

「むむ!さすがは征服王。見る目がありますね?……あ、でもあげませんよ?」

あまり的な言いようにウェイバーは怒りで一の句が告げられない。あとライダー、自分のマスターが侮辱されたというのにその態度はどうだ?

だが、怒りを鎮めると同時にウェイバーはひとつ結論にたどり着く。今の理屈から言えば、少なくともバーサーカーを攻撃してセイバーを援護することはできるはずだ。それをしないということは、何らかの意図があるのかもしれない。そう推察すると、ウェイバーは自然と自身も戦いに目を向けていた。

戦いが始まつて数分……既にランサーはフォックスの技量を見切つていた。そして同時に驚嘆もしていた……互角なのだ。

対峙しているのは、普通ではないにしろ間違いなく正真正銘の人間。だが目の前の男は、その手に持つ白銀の刀で宝具である自身の一槍を捌いていた。

セイバーと比べれば、パワーと剣の技量は劣る。……が、スピードはほぼ互角だ。だが真に驚くべき所はその瞬発力だろう。急に動きが緩んだかと思つたらきなり最高速に達して斬撃を繰り出す。まるで猫科の猛獸のような俊敏性から繰り出される緩急自在の動きは、セイバー以上に捉えづらい。恐らく魔力による強化も行なつているのだろうが、それでも生身とは思えない動きだ。

さらに自身の槍を受け止めているあの刀、……。宝具と打ち合えている以上、あれも恐らくただの刀ではあるまい。何らかの概念武装かもしれないが、その程度では自身の宝具を受けて傷一つつかないという事実を説明できない。となれば……あれも歴とした宝具の類か

もしれない。

それでも地力ではランサーの方が優勢だ。

にもかかわらず目の前の魔術師を仕留めきれていない最大の理由が、その再生能力だった。

目の前の敵は、自身の槍の全てを捌けてはいない。いくつかはその身を抉り、浅い傷を作っている。

……が、それらの傷の全てが一瞬の内にひとりでに治つていくのだ。

高速再生能力。それ自体は神代を生き、様々な怪物と対峙してきたランサーからすれば、そこまで珍しい能力ではない。だが厄介なことにその能力は、必滅の黄薔薇による治癒不可能の傷すら癒していくのだ。破魔の紅薔薇による傷に比べるとやや回復が遅いが、それは大した問題ではない。重要なのはその再生力が、宝具による回復阻害すら無効化しているということだ。

ランサーの宝具は、白兵戦では非常に有利だが決め手に欠けるという側面も持っている。魔力を打ち消す槍と、治療不可能の傷を負わせる槍……これらは本来長期戦で真価を發揮するのだが、魔術を使わず、必滅の黄薔薇の回復阻害の呪いをはねのける者が相手となれば、ランサーの槍は宝具としての利点をほとんど生かすことができない。ならば回復する前に仕留めればいいと攻め立てるのだが、あいにくランサーとフォックスにそこまでの技量の差はない。

自身と目の前の魔術師との相性の悪さに内心歎嘆しながらも、ランサーの顔には喜悦が浮かんでいた。

確かに再生能力に助けられているところも少なからずある。……が、敵の実力は間違いなく超一級品だ。人の身でありながらこれほどの

戦いが出来るものは、現代においてはほとんどいまい。予期せぬ強敵との対決に心が弾んでいく。

「ふつ……」

「なつ……？」

驚愕の声はランサーだった。フォックスは突き出された破魔の紅薔薇ルゲを空いている左腕で巻きつけるようにして受け止めたのだ。

もちろんそんな無茶なことをして無事なハズがない。槍による裂傷から血が吹き出し、受け止めた左腕全体が軋みを上げる。

だがフォックスの行動はそれだけでは終わらない。腕の痛みには構わず、突き出された力のベクトルを利用し、槍ゲイ・ジャとランサーを後ろに投げる。

「つねつ……？」

突如空中に放られたランサーだが慌てるのではない。すぐに態勢を整え直す。だが着地の前には、既に傷が回復し刀を振りかぶったフォックスが目前に迫っていた。

次の瞬間、白銀が一閃した。

「……外したか」

僅かに残念そうに呟くフォックスだが、そこに落胆の表情はない。むしろこの程度では仕留められないのが当然だらう。

再び目の前　　左頬を切り裂かれた槍兵に向き合つ。

あの時、咄嗟に刀を槍でガードしたランサーだが空中で身動きが出来ない状況では、やはり完全に斬撃を防ぐことは出来なかつた。一步間違えれば首をはねられていただろう。

「見事だ……」

だが死にかけた彼の口から出てきたのは、賞賛”だつた。

「肉を切らせて骨を断つ。だが切られた肉はすぐ元通りか……。怖いな」

「英靈のお墨付きを貰えるとは、光榮だ」

軽快に返すフォックスだが、彼も内心余裕はない。自身の能力がランサーに相性が良いのは理解しているが、決め手に欠けているのは同じなのだ。必ず勝つ必要こそないが、ランサーの宝具の能力上、ここで仕留められるのなら仕留めておきたい。

だが、突如自身のサーヴァントからの”念話”でその均衡は

崩れた。

「<sup>ア</sup><sup>ア</sup><sup>ア</sup><sup>ア</sup><sup>ア</sup><sup>ラ</sup><sup>ラ</sup><sup>ラ</sup><sup>ラ</sup><sup>ラ</sup><sup>ラ</sup><sup>ラ</sup><sup>イ</sup>！」

突如響いた轟音。その大地を揺るがさんばかりの雷鳴と咆哮の正体をフォックスは知っていた。何より今、使い魔からの念話で伝えられているのだ。"アレ"が来ると。

間一髪、飛び退いたフォックスとランサーは回避が間に合つたが、直後目の前を走り去つたライダーの"真の標的"バーサー力一は、セイバーに意識を向け続けていたため、その雷の戦車の直撃を食らつた。先程のキャスターの炎を食らつた時と同じ構図だったが、威力の桁が違う。

並の英靈なら一発で息絶えたであろう躊躇をまともに受けたバーサー力のダメージは致命的だった。

「 ほう？なかなかどうして、根性のあるヤツ」

駆け抜けたライダーの視線の先には 果たして、消滅を免れ、地に伏せた黒の狂戦士がいた。

全身を神牛と戦車に轢き尽くされ甚大なダメージを負つているが、持ち前のタフさと最後の大打撃を身を捻つて避けることで即死だけは避けていたのだ。

だがその動きは弱々しく、僅かに感じられるしかできていない。

生きてはいるようだが、ほとんど虫の息だらう。

案の定、その姿が靈体化して消えていく。鎧から覗く瞳には、最後まで殺意の炎を灯していたが、戦闘続行は不可能と判断したらしい。

「と、まあこんな具合に、黒いのにはま、退場願つたわけだが

虚空に向かつて話すライダーだが、全員が理解している。いつたい誰に向けての言葉なのか。

「ランサーのマスターよ。どこから覗き見しておるのか知らんが、下衆な手口で騎士の戦いを穢すでない……などと説教くれても通じんか。魔術師なんぞが相手では」

そこまで言つとライダーは、姿の見えぬマスターに向かつて、挑発的な笑みを浮かべ宣言する。

「ランサーを退かせよ。これ以上そいつに恥をかかすとこうのなら、余も加勢する。セイバーとそこキャスターのマスターと余の三人がかりでランサーを潰しにかかるが、どうするね？」

『……撤退しろ!ランサー。今宵は、ここまでだ

その言葉は、怒りを無理やり押さえつけるように絞り出されたが、それでも今のランサーにとっては何よりもありがたい命令だらう。

「感謝する。征服王」

「なあに、戦場の華は愛でるタチでな」

ランサーの謝意にライダーは笑つて返した。同時に場の空気が穏やかなものへとなつていいく。どうやら引き上げ時のようだ……。

（ここまでは、ほぼ予定通りだな。」仕込み”も終えだし、俺たちも行こうキャスター）

（わかりました ご主人様<sup>マスター</sup>）

念話で自身のパートナーに呼び掛け、フォックスも倉庫街を立ち去る。

向かう先は、既に決まっていた。

## 第八話 マスター達の一幕にて（前書き）

八話目です。 真面目展開です。

## 第八話 マスター達の一幕にて

「ハアツ…ハアツ……」

間桐雁夜は瀕死だった。

魔術師としての素養はあつても、わずか一年の歳月で聖杯戦争にマスターとして参加する必要があつた雁夜は、体内に植えつけた刻印虫の力で無理やり魔力を生成する必要があつたのだが、その苦痛とリスクは想像を絶するものだった。

港場での戦いで、彼にとつての憎き仇敵 遠坂時臣のサーヴァントであるアー・チャ―を打倒すべくバー・サー・カーをけしかけた彼は、自身も下水道から近付いて戦況を見守つていたのだ。

結果として、アー・チャ―を退けたことは雁夜にとつて戦果と呼べるものだつたが、代償は大きい。

戦闘中、魔力を生成するたびに体内で暴れ狂う刻印虫に何度も意識をもつていかれかけた。

さらにその後バー・サー・カーが一切命令を聞かずセイバーに襲いかかり戦い続けたことで、バー・サー・カーにより大量の魔力をもつていかれ、余計に消耗してしまった。

幸いライダーの一撃でバー・サー・カーが靈体化したことで急死に一生を得たが、肉体の損傷は甚大だ。あれ以上バー・サー・カーが暴れたら、魔力を吸われすぎて死んでいたかもしれない。

結果、下水道のマンホールを開けることすら時間がかかるほど憔悴し

きつた雁夜は、今こうして出てきた道路の上で呼吸を整えているのだが、その顔は疲労の色が濃い。全身からは刻印虫の反動で破裂した毛細血管から血が滲み出ている。死に体、というのが正しい表現だろう。

ただでさえ維持に大量の魔力を必要とするバーサーカーを使いこなすのは、即席の魔術師である雁夜には荷が重すぎた。

だが諦めるわけにはいかない

前途多難といふ言葉すら生ぬるいが、雁夜には使命がある。

そのためには死ぬわけにはいかない。生き残らなければならぬ。

実家の魔術を嫌い家をでた自分に代わり、あの妖怪の餌食となつている少女。”教育”という名の虐待で、幼いながらも体も心も犯され尽くしたあの子を助けなければならない。あの地獄は本来自分が受けるべきものだったのだ。

自らのやることを再確認し決意を新たにするが、体の方は言うことをきいてくれない。原作ではここから立ち去る余力があつたのだが、フォックスの介入によって本来よりも戦闘が長引いたため、その分の魔力を食われることとなり、ダメージも上乗せされていたのだ。

それでも、いつまでもここにいるわけにはいかない。今は夜中で人影がないが、もたもたしていたら誰かに接触する可能性はあるのだ。

必死に体に鞭を打つが、突如その意識は何者かに狩り取られた

冬木ハイアットホテル地上三十一階 都市開発により次々と新しい高層ビルが建っていく新都でも、この高さに並ぶ建物は未だない。

そんな最上階のスイートルームを財力に物言わせて貸し切ったケインス・エルメロイ・アーチボルトは、ひとり眉間にしわを寄せていた。その表情は不機嫌としか形容しようがない。

彼は生まれながらの”天才”だった。

九代続く魔導の名門 アーチボルト家に生を受け、魔術師として他の追随をゆるさない才能を持ち、常に最高の結果を出し続けてきた彼の力は、自他共に認める”本物”なのだ。

それ故に、ケインスは今まで自分の思う通りにならないことなど一

度としてなかつた。彼にはそれだけの力があつたし、若くして時計塔の筆頭講師の地位におさまり、華々しい研究成果をあげ、破竹の如き勢いの出世を果たしたのも当然の帰結だったのだ。

だからこそ、彼は今の自分の状況が納得できない。

「ランサー。出てこい」

「　　は。お側に」

打てば響くような速さで実体化したのは、槍の英靈　　彼のサー・ヴァント、ランサーだった。そしてケイネスの不機嫌の最大の原因でもある。

「港場では、」苦労だつた。誉れも高きテイルムッド・オティナの双槍、存分に見せてもらつた

「恐縮であります。我が主よ」

労いの言葉をかけるケイネスと、それに淀みなく答えるランサー。一見すると理想の主従の形のようだが、ケイネスの声は剣呑している。

「ああ、存分に見せてもらつた。その上で問わせてもらひがなランサー、貴様一体何をしていた？」

「……と、申されますと？」

「とぼけるなよランサー。私に勝利を捧げると抜かしておきながら、あの醜態は何だ？貴様は自分の力不足を証明するために私に戦いの

許可を求めたのか？

「我が主よ……そのようなことは決して……」

「黙れッ！！」

一喝と共にケイネスの表情が怒りに染まる。その鋭さは、明らかに先程までの何かを我慢しているようなところはない。

溜まりに溜まつた鬱憤を爆発させたといった様相だ。

「貴様の実力を信用してああして戦いを許したというのに、結果はどうだ！？宝具だけでなく令呪まで使つても貴様はただのひとりも討ち取れなかつた！この失態をどう償う！？」

傍から見ればランサーの健闘は十分讃えられるものだが、ケイネスにしてみれば、その戦果はあまりにも納得のいかない微々たるものだつた。あれだけのサーヴァントが集結し、討ち取るチャンスがあつたというのに、その実一騎も仕留められていない。

結果としてランサーは、実質自身の正体と宝具の力を他の者に晒してだけに過ぎないというのがケイネスの評価だつた。無論集まつた他のサーヴァントやマスターの正体もいくらか知ることは出来たが、それでも令呪一画を使用した損失を考慮すると、明らかにデメリットが多い。

「何より、貴様は戦いを”愉しんで”いた。私に勝利を捧げると誓つておきながらセイバーを討ち取るチャンスを逃し、あまつさえ人間の魔術師にまで遅れをとつた。そんなにも彼らとの競い合いは愉悦だつたか？さすがは生糞の騎士だな」

たっぷりと皮肉を含ませたケイネスの叱責にランサーは頑垂れたまま沈黙を貫く。

彼とて思ひとじはある。それは違ひと否定したいといふもある。

だが自身が確たる戦果を挙げられなかつたことも、この槍の英靈は認めていた。セイバーとキャスターのマスターとの戦いに心躍らなかつたと言えば嘘になる。主君に大口を叩いて勇んで戦端を切つたといつうのにこの程度の結果しか残せなかつたのは明らかに失態だとも考えていた。

「 いい加減にしなさいケイネス」

だがケイネスの叱責は、突如その凜とした声音に遮られた。

声の主はすぐに一人の前に現れた。燃えるよつた赤の髪と女帝さながらの怜俐な風格をそなえた、まるで氷のよつた雰囲気の美女。その立ち居振る舞いは、凡人にはない高貴さと品位が漂つている。

ケイネスの許嫁……ソラウ・ヌアザレ・ソフィアリだつた。

「ランサーは良くやつたわ。失態の原因は貴方の判断ミスでしきう？」

「ソ、ソラウ……」

普段のケイネスならば、これだけで激昂していただろう。そうならないのは、目の前の女性が彼にとつて”特別”だからである。

彼女が、恩師である降霊科の学部長の娘ということもある。だがもつと根本的な部分でケイネスは彼女に頭があがらなかつた。彼はソラウに恋しているのだ。惚れた弱み、といつやつである。

「ソラウ、確かに令呪を使ったのが早計でなかつたとは言わない。だが、ランサーが敵を討ち取れなかつたのも事実だ。それにあのセイバーの能力の高さは脅威だ」

「だからどうしたというの？いくらセイバーの能力が高くて必滅<sup>イ・ボウ・ゲ</sup>の黄薔薇で傷を負わせたんだからいつでも倒せたのよ。それにランサーの槍はあのバーサーカーに有効な宝具だった。なら一旦バーサーカーを倒してから、その後ゆっくりセイバーを倒せばよかつたじやない」

「だ、だがそれでもキャスターのマスターは介入してきたはずだ…」

「そうかもね。でも仮に介入してきたとしても貴方が抑えればよかつたじやない」

「わ、私が？無茶を言つたソラウ！あんなサーヴァントと戦えるような男に！？」

「貴方つて人は…ねえケイネス、貴方まさか私たちのアドバンテージを忘れたわけじゃないわよね？」

ソラウの指摘に、ケイネスは言葉に詰まつた。彼女の言わんとすることはわかる。

今回の聖杯戦争にあたつてケイネスは、他のマスターにはない、あ

る”秘策”を用意していた。

本来サーヴァントは、令呪を宿したマスターからの魔力供給によつて現界を維持する。だがケイネスはこのシステムに独自の改造を加え、令呪は彼が宿しつつも、ランサーへの魔力供給は許嫁のソラウが行つという分割契約の形をとつていたのだ。

そのためケイネスは、本来ならサーヴァントに供給する分の魔力の全てを、自身の魔術の行使に回すことができるといつ他のマスターにはないアドバンテージを有していた。

「貴方言つてたわよね？『どんなマスターが相手でも私の礼装と魔術で華麗に蹴散らしてみせよ』って。なのにその弱気は何？港場でも終始隠れてて、セイバーのマスターの女を狙うことすらしなかつたじやない。情けないったらありやしないわ」

「ソラウ様、そこまでにして頂きたい

「ストップをかけたのはランサーだった。いつの間にか顔を上げてソラウを見据えている。

「それ以上は、我が主への侮辱だ。騎士として見過じせません」

「いえ、そんなつもりじゃ……御免なさい。言ひすぎたわ」

途端に剣幕をおろし、恥じらいひとつに田を伏せるソラウ。そんな許嫁の豹変を、ケイネスは鬱屈した気分で見ていた。そして彼は自身のサーヴァントの”呪い”を思い出す。

『愛の黒子』

英靈『イルムッド』が生まれ持つた異性を虜にする呪い。

もちろんそんなものがソラウを惑わしているとは、彼は露ほども思っていない。常人ならざ知らず、名門ソフィアリ家の息女であるソラウには、そういう魅惑の魔術に対する強い抵抗力がある。邪推など愚かなことだ。

だが、突如鳴り響いた防災ベルの騒音がケイネスに思考を切り替えさせた。

「……なに？ 何事？」

困惑するソラウとは対照的に、ケイネスは受話器を取り上げ係員からの連絡に冷静に耳を傾ける。この辺の貫禄は流石というべきなかもしれない。

「下の階で火事だそうだ。小火程度のものだそうだが、どうやら火元は何カ所かに分散しているらしい。まあ、間違いなく放火だな」

「放火ですか？ よりによつて今夜？」

「フン、偶然ではあるまいぞ」

鼻で笑い飛ばすケイネス。その眼差しは既に魔術師としての鋭さを取り戻していた。

「人払いの計らいだよ。敵とて魔術師。有象無象共がひしめく建物の中でやり合う気にはなれんだろうからな」

そう これは間違いなく襲撃だ。恐らく倉庫街の戦いでまだ暴れ足りない輩が押しかけてきたのだろうが、ケインズは襲撃者が何者なのかは既に予測がついていた。ランサーの必滅の黄薔薇ゲイ・ボウで左腕を奪われたセイバーだろう。

「ランサー、下の階に降りて迎え撃て。ただし無下に追い払つたりはするなよ」

「承知しました。襲撃者の退路を断ち、この階に追い込めば宜しいのですね？」

「そうだ。お客人にはケインズ・エルメロイの魔術工房をとつくりと堪能してもらおうではないか」

キヤスターもそうだが、魔術師という人種は總じて自身の工房でこそ最大の力を發揮できる。ケインズもその例に漏れず、今回丸ごと貸し切ったホテルの最上階を、自身の拠点に相応しいように”改装”していた。

既にケインズの要塞と化したこの階は、強固な防御力を持つ結界が何十にもはられ、彼の得意とする降霊術で呼び出した悪霊、さらにトラップの類も無数に仕掛けである。その堅牢さは、たとえサーヴァントであつても攻略は容易ではない。

そして当のケインズは内心ほくそ笑んでいた。この襲撃は、緒戦で不覚を取り、愛する婚約者に臆病者呼ばわりされた汚名を返上する絶好の機会になる。今度こそ敵をひとり残らず狩り尽くし、自身の

力を証明してみせよう。

意気込むケインズだが、彼はその身に迫るものに気付けなかつた。いや、無理もないだろ？。

次の瞬間、ケインズは文字通り地に落とされた

「準備完了だ。そちらは？」

『異常なしです。いつでもどうぞ』

冬木ハイアットホテルからやや離れた物陰から、衛宮切嗣はホテルの斜向かいの高層ビルで待機している久宇舞弥に連絡を入れた。万一千事が上手いかなかつた時の備えとして、彼女にはホテルの監視をしてもらつていて。全ては順調だ。

おもむろに切嗣は携帯に番号を打ち込み始めた。呼び出されるのは、架空名義のポケットベル。

切嗣がホテルに仕掛けたC4プラスチック爆弾への起爆の合図だ。

爆弾といつても、仕掛けたのは極少量であり外にも爆発音が漏れないことはない。代わりに響いたのは、ホテルの鉄筋が不気味な唸りを上げる音だけだった。

「ホテルが、ホテルが崩れる！」

それは誰の叫びだったのか。恐らく避難客のひとりだろう。

果たして高さ百五十メートルを誇る冬木ハイアットホテルは、直立の状態のまま地面に吸い込まれるように崩壊していく。

デモリッシュショーン  
爆破解体 主に高層ビルの解体に使われる発破解体技術のひとつ。

ビルそのものの重量を利用して、周囲に被害をもたらすことなく建築物を瓦礫に変えるこの手法を、今回切嗣は暗殺として使った。

既にホテルの最上階をケイネスが工房として改造していたのは調べがついていた。その堅固さは、切嗣から見ても攻略不可能と評するには十分なもので、さすがはロード・エルメロイと言えるだろう。

だから切嗣は爆破解体という手段で工房ごと破壊した。いくらあの工房が強固でも、それを形成している建物ごと崩されたらどうしようもあるまい。ケイネスはそのまま拠点に立てこもっていたらどうから、地上百五十メートルからの自由落下でビルの瓦礫の仲間入りだろう。

「舞弥、そつちは？」

「最後まで三十二階に動きはありませんでした。標的はビルの外には脱出してはいません」

となれば、ケインズの暗殺はほぼ成功したと見ていいだろう。だが、まだ決めつけるには早い。セイバーの左腕が治つているか確認するまでは、予断は許されないので。

全てを見届けた切嗣は、すぐに次の場所へと向かう。裏道を抜けてたどり着いたのは、一棟の廃ビルだった。

全高はハイアットホテルの十分の一程度だろう。裏通りの人目につかない無人の建物の中に足を踏み入れていく。既に頼んだものは届いているはずだ……。

建物の中に物はほとんど置かれていない。元事務所の名残としてテスクの残骸などが散乱したりしてると、切嗣が足を進めた先四階の一室に目当ての人物はいた。

「お待ちしておりました衛宮殿。こたびの『ご利用、誠にありがとうございます』

恭しく礼をとつた男　　武器商人ビクトルに対し、切嗣は簡潔に尋ねる。

「注文の品は？」

「アラカルト」

返答と共にビクトルは、背後の巨大な、古い金庫を模した倉庫を開

け放ち、品物を見せる。

収納されているのは銃火器。多種多様に揃えられた殺人兵器たちは、大火力の物も多い。

超大型拳銃デザートイーグル、MP5サブマシンガン、個人防衛火器に分類されるP90、アサルトライフルの代表格AK-47。さらにはバレットM82対物ライフルや対戦車ミサイルM47ドラゴンなど、およそ日本という国ではありえない光景が広がっていた。

「何とか注文の期限には間に合わせましたが、個人でこれだけの買物というのは久しぶりですな。戦争でもやる気ですか？」

「ああ、その通りだよ」

「冗談交じりのセリフだつたが、的を得ていた。正に切嗣は戦争に身を投じている。

「料金は既に納金を確認済みですので。品物に不具合がないかお確かめになりますか？」

言われる前に切嗣は武器のチェックをしていた。彼が今回これだけの重火器を揃えたのは、言うまでもなくあの『死徒殺し』への対策の一環である。

事前の調査でこれまでの予定の武器では心許ないと判断した切嗣だつたが、短期間でこれだけの武装を揃えるのはやはり骨が折れた。

だが用意しておいて正解だつた。港場での戦いは全て観察していたが、正直あれの戦闘力は想像以上だつた。さらに他のサーヴァント

達の戦力も決して侮れるものではない。これらの武器で例のアインツベルンの城の守りを強化すれば、それなりの効果を発揮できるだろ、ひ。

念入りにチェックを進める切嗣だが、突如その作業は中断された

それは気配。敢えて言つなら死線をぐぐり抜けたものだけが感じられる変化。

振り向いた先には 奴がいた。

「初めまして、だな。衛宮切嗣」

「……シルバー……フォックス」

今、誰の目にもつかないところで激戦が始まろうとしていた

## 第九話　『魔術師殺し』VS『死徒殺し』にて（前書き）

いつの間にか十万PV超えてました……。恐ろしい……。

## 第九話　『魔術師殺し』VS『死徒殺し』にて

状況は最悪だ。

「衛宮切嗣。一度限りの勧告だ」

スラリ、とフォックスの懷から世界最硬の刃物が抜き取られる。その両手には、港場では無かつたグローブのようなものがつけられていた。

「武器を捨てて降伏しろ。命まではとらない。お前がセイバーの本当のマスターであることも調べはついてる」

「……何が目的だ？」

切嗣は訳がわからなかつた。自分たちは敵同士。殺すべき対象をどうして生かす。

思えばこの登場の仕方も不可解だ。気づかれていいうちに、さつさとこのデスクを投げつけたりでもすれば、それだけで切嗣は終わっていただろうに。

……そもそも何故奴はこの場所に気づいた？

切嗣は知らないことだが、実はフォックスにとつても今回のことば

賭けに近いものだつた。

前世から引き継いだ穴だらけの原作知識。その中には切嗣のホテル爆破のこと也有つたのだが、彼が何をしていたか、詳しい部分はほとんど覚えていなかつた。

だからフォックスはホテルの近くに身を潜め、臭いで切嗣を見つけてた。

彼の能力 ヒーリング・ファクター 肉体再生能力には、副次効果のひとつとして”五感の強化”というものがある。これによりフォックスは、魔術なしでも1km先の闇夜も鮮明に捉えることができ、雑多の中でも音の種類を聞き分け、死角からの銃撃にも対応できる。

当然嗅覚も、犬なみ とまではいかなくとも常人の比ではなく、切嗣のコートに染みついた硝煙の臭いを捉えるのは、困難ではあるが可能だつた。最も、これがどこかの内戦地帯だつたらあの集団の中から発見するのは不可能だつただろう。日本という火薬類が極めて目立つ国だからこそその結果だ。

「お前には死んでもらうわけにはいかない。……が、このまま暗躍されても困るんだよ。暫く監視下に置かせてもらいつ

言葉から推測するに、どうやら田の前の敵は自分を生かす理由があるらしい。だが、ここで捕まるわけにはいかない。

既に弾込めを終えたP90の5・7×28mm弾の洗礼がフォックスに降り注ぐ。だがフォックスは、その全てを十倍速のビデオのような動きで弾き返した。

隣にいるビクトルが、ありえないものを見たかのような表情になっているのが分かる。数え切れぬ修羅場をぐぐつてきた切嗣にしても初めて見る光景だった。だが冷静さは失っていない。

「仕方がない。足だけ切り落として確保させてもらひ」

交渉の決裂と共にフォックスは、やはりといふか近くのデスクを投げつけてきた。人外の怪力で放たれた鉄塊が唸りを上げて迫る。

「Time alter (固有时制御)  
cel (一倍速)」

詠唱と共に切嗣は駆け出す。その両手にはたつた今手に入れたP90とMP5の一挺が握られていた。

そして気づいたが、どうやら今の投擲は自分を狙つたものではないらしい。轟音と共に重火器達がお釈迦にされたところを見ると、武器破壊が目的だった様だ。ビクトルの無事は確認できない。

状況を整理しながら切嗣はビルの中を疾駆する。その速度は、どう考へても常人に出せるものではない。

## 固有時制御　　『魔術師殺し』衛宮切嗣が有する切り札の一つ。

彼の生家、衛宮家は代々時間操作に関する魔術を研究してきた家柄で、特定の空間を外界から切り離し、思い通りに操作するという“固有結界”に通ずる大魔術の探求を続けてきた家系で、五代目となる切嗣もその秘奥の一部を継承していた。

だがこれは本来大魔術を前提としたものであつて、発動には術式の規模も必要な魔力も桁違いに大きいものとなる。故に戦場に生きる切嗣にはなんの役にも立たない魔術だった。

だが切嗣は、この術式を極めて小規模かつ効率化することで、独自の応用法を編み出した。それが固有時制御である。

本来周囲の空間の時間法則を塗り替えるこの大魔術を、切嗣は自身の肉体にのみ適用することで、わずか一詠唱で術を発動させることに成功したのだ。

この術の発動中は、切嗣の肉体は外界の時間法則とは切り離され、自身の体を加速させたり、あるいは停滞させることが可能になる。だがそのリスクは他の魔術と比べても極めて大きく、術が解ければ世界の修正力によつて加速した分の反動が肉体にファーデバックして返つてくる。断じてこんな初っ端から使ってよい魔術ではない。

だがそれでも足りない　　固有時制御で加速できるのは、肉体への負担を考えると倍速まで。だとしてもあの化け物の獣じみた速さには及ばない。

逃走は困難。階段でのかけっこでは100%追いつかれる。ビルから飛び降りても自由落下より速くあの男は自分を仕留められるはず。

セイバーを呼ぶことも考えたが却下。もし令呪で呼び出したらあの男は間違いなく撤退を選ぶだろう。人目につけとこに逃げられたら令呪の無駄遣いで終わる。セイバーの召喚は最終手段だ。

幸いなことに地の利はこちらにある。ビルの構造は熟知しているから、立ち向かうではなく逃げに徹しながら牽制を続ければ反撃の機会は巡ってくるはずだ。

そして走りながらも、頭の中で切嗣は戦力の確認を済ましていた。

**敵の戦力**　　近接戦においてだがサーヴァントとも渡り合つほど。特にスピードはサーヴァント換算でBからAと推定。港場での戦いを見る限り、銃火器など飛び道具の類は見当たらない。距離を詰めさせず遠距離からの銃撃に徹するのがベストと思われる。

**自身の戦力**　　両手のサブマシンガン一挺に懐のキヤレ「M950、そして自身の”礼装”たるトンプソン・コンテンダー。幸い既に『魔弾』は装填済み。爆弾の類はなし。やはりアウトレンジからの牽制に徹しつつ、チャンスを見極め”切り札”的使用が最善と判断。

結論を下した切嗣だが、その田論見のひとつは早くも崩れさつた

加速で逃げつつ、追いつかれる前に銃弾で隙をつくる。それ自体はフォックスには有効な手だ。サーヴァントとは違う人間である彼には、神秘のない近代兵器でも傷をつけることが出来る。勿論すぐに再生するが、暫しの足止めとしては効果的だ。

……が、突如フォックスは追跡しながら周囲の瓦礫に左手を突っ込み、掴めるだけの残骸を掴んだ。

切嗣は知らなかつた。彼が両手にはめているグローブ あれこそが『死徒殺し』シルバー・フォックスの最強の遠距離武装なのだ。

確かにフォックスは、基本的に弾のストックが必要となる射撃武器の類は使わない。さらに支援系特化型の魔術師であるため、他の魔術師のように攻撃系の魔術さえ行使することもできない。だが彼は遠距離から攻撃できることの有効さを理解しているし、その手段も必要としていた。そこで彼が選んだ戦法が、所謂”石つぶて”である。

投石術というのは古くから合戦でもよく使われていた殺傷技術で、そのローコストと使いやすさから、日本の戦国時代には弓矢、鉄砲に次ぐ威力を発揮したと言われている。

そして破壊力は言わずもがな。野球選手の投球を見ればわかるように熟練者が投げた石つぶては、下手な弓よりも威力がある。フォックスはこの戦法に目を付け、対死徒用の技術として研鑽を積み、メジャー・リーガーの三倍以上の速さで正確に投擲することも可能としたが、彼の獲物である死徒達相手ではまだ力不足だった。そこで彼

は、もう一段階の”改良”を施した。

『土』と『水』　　『個体』と『液体』といつ概念に通ずるこの一つの魔術属性を持つていたフォックスは、自身の起源『再生』により特化した修復魔術の応用もあり、物質に自身の魔術を染み込ませることを得意としていた。基本的に彼はどんな物質にでも”強化”をはじめとした魔術を瞬時に打ち込むことができる。

この特性を利用してフォックスが作り上げた魔術礼装が、今はめているグローブだった。このグローブには手に掴んだ物質への魔力の伝導性を上げる効果があり、これにより掴んだものを強化し、聖性を附加することで即席の対化け物弾を作ることができる。彼が投擲すれば、そこらの小石でも大口径の法儀式済み銀弾頭と何ら変わらない威力となつて死徒を撃ち抜くことができるのだ。

果たしてその威力は發揮された

フォックスは掴んだ瓦礫をそのままアンダースローの体勢で一気に投げた。咄嗟に切嗣は柱の影に身を隠したが、その選択は正しかつた。放たれた残骸たちは大口径のショットガンながらの破壊の嵐をまき散らす。

「Time alter (固有时制御)  
cel (一倍速) -」

二度目の加速。戦士の本能に従い、飛び退いた切嗣の目に映つたのは、今自分が防御に使つた柱が三つに斬り倒されたところだった。

すぐさま切嗣は下がりつつMP5の連射で牽制するが、その全てが斬り返される。そして次にフォックスが掴んだのは今彼が斬った柱の一部だった。それを今度はオーバースローで構え、投擲する。

「Time alter（固有時制御）　double ac  
cel（一倍速）！－！」

すぐさま避けつつ距離を取るが、固有時制御の乱発による肉体へのダメージは既に限界をむかえつづつあつた。これまでの戦闘時間僅か四分。

（ダメか、やはり僕には少々荷が重すぎる）

既に体は限界だ。苦痛には何ら頼着しない切嗣だが、これ以上固有時制御を使えば最悪命にかかる。そもそも正面から戦うというのは切嗣の本来のスタイルではないのだ。

廊下を駆けながら、いよいよ令呪でセイバーを呼ぶことを考えた切嗣だったが、奥の光景と自らの幸運に内心笑みを浮かべる。

「成程、”サービス”か。いい仕事をしてくれる」

「そろそろ、か？」

既に衛宮切嗣は限界のハズだ。

セイバーを呼び出すことも考えられるが、令呪を使わせる暇を与える気はないし、呼んだとしても瞬時に退却すればいい。最悪でもセイバーを御す力がひとつ減るのだから戦果としては十分だ。

そして切嗣が逃げた廊下に入るフォックスだが、その表情が驚愕に変わる。

廊下の奥で、切嗣がバレットM82を伏せ撃ちの状態で構えていたのだ。

あの時武器商人ビクトルは、戦いの余波を受けることはなく逃げたのだが、その際お得意様への置土産として、唯一無事だつた”商品”を床に固定する形でセットしていたのだ。

瞬間　　2km先の人間の体をも消し飛ばす12・7×99mm  
徹甲弾が火を吹いた。一直線の廊下に逃げ場はない。……ならばやることとはひとつ。

彼が得意とする『物質への魔力の伝導』。数多の物質の中でも最も構造を知り尽くした”己の肉体”のスペックを最大にする。

刹那　　瞬きよりも速い超音速で放たれた対物ライフル弾は、破壊不可能の最強金属で掠えた刃の一刀の前に、真つ一つとなつた。衝撃波でフォックスの体がたらを踏む。

だが切嗣の攻撃はそこで終わりではなかつた。いや…むしろこれこそが本命。彼が持つ唯一にして最強のただ一発だけの対魔術師礼装を放つべく、愛銃コンテンダー・カスタムを構える。

切嗣の起源は『切断と結合』の複合属性。この特異極まる彼の起源は、必ずしも『破壊と修復』を意味しない。何故なら切れた糸を結べば、結び目の部分だけが他よりも太くなり、結果的に全体の長さは短くなる。つまりそこに『変質』が生じてしまうのだ。

そして切嗣はこの起源を最大限戦闘に活用することにした。自らの十一肋骨を切除し、粉状にすり潰したそれを仕込んだ四十九発の魔弾。それこそが衛宮切嗣の最強にして、彼の『魔術師殺し』の名を象徴する切り札『起源弾』である。

この『起源弾』を撃ち込まれた人間は、体に切嗣の起源が具現化する。常人が食らえば、被弾した部位が一旦破壊され、古傷の様に癒着する。……が彼の起源によつて、纖細な毛細血管や神経は元通りにはならず機能を失つてしまつ。

そしてこれが魔術師に放たれた場合のダメージは、より深刻なものになる。もし僅かでも被弾すれば、通常の体組織だけでなく魔術回路にまで『変質』が生じ、回路としての用を成さなくなる。魔術師の命とも言える魔術回路は緻密にして纖細であるため少しでもその流れが乱れたら、さながら高圧電線がショートするように、全身をめぐる魔力が暴走し、即死、あるいは確實に人並みの機能を失わせるという正に魔術師にとって天敵とも言える性能を誇つていた。

さらにこの弾丸の脅威はそれだけではない。この改造コンテンダーの使用弾薬である30・06スプリングフィールド弾

この本

来ライフル専用である大威力の弾頭を防ぐ手段というのは基本的に存在しない。もし魔術によつて防げば、術式を通して術者の肉体にフィードバックしてしまつし、物理的に防ごうとすれば、分厚い特殊合金製の盾でも持つていなければ確實にその餌食となつてしまつといつおよそ隙のない概念武装といえよう。

そして港場での戦いを見ていた切嗣は、この切り札はシルバー・フォックスに有効という結論を下していた。いくら再生すると言つても全身の魔術回路が一斉にダメになれば、治るのにはタイムラグが生じるのは間違ひない。それだけの隙があれば、今度こそバレットM82を直撃させて全身を吹つ飛ばせる。そこまでの深刻なダメージを受ければ、さすがにただでは済まないだろ。逃げ場がない廊下で、しかも僅かとはいえ体勢を崩している今の状態で、通常の銃弾の倍以上の弾速を誇るこの弾が命中する確率は高い。さらに敵が魔力という電気を全力で使用している今こそが、この礼装が最も威力を発揮する好機。

だがフォックスの行動はまたしても切嗣の予想を上回るものだつた

放たれた魔弾がフォックスに当たることは無かつた。彼はその場から動かず、上半身をながらマトリックスのようにのけぞらせて避けたのだ。

全身の魔力を総動員した身体強化で体中が軋みをあげるが、あの魔弾を食らうよりは百倍はマシな結果だつ。現に、魔術の反動によるダメージは一瞬で再生した。

フォックスも『起源弾』の自身への有用性には気付いていた。故に、これまでの戦いでもそれだけを警戒し、同時に対策として彼は弾を受けないという選択をした。およそほぼ全ての魔術師には不可能な芸当だろうが、それが最も自分に合つた対処法というのがフォックスの結論だった。某赤い彗星ではないが、当たらなければどうということはない。

そして切嗣は状況がほぼ詰んだことを理解していた。『起源弾』はコンテンダーの単発式という構造上、一発ごとに弾込めが必要となる。そんな暇は当然ながら無いし、既に敵は体勢を立て直してこっちに向かってきている。小銃の弾幕は、多少ダメージを度外視して突っ込まれればその時点でアウトだ。

だが切嗣の幸運はまだ続いた。

ひょっとしたらこの時、原作での主人公補正が働いたのかもしれない。後でフォックスがそう疑うほど完璧なタイミングだった。

咄嗟にフォックスは疾走から一転　　後方へと飛び退く。その進行ルートには、ドアをぶち抜いて飛んできた六本の『黒鍵』<sup>黒鍵</sup>が突き刺さっていた。

そして動く必要のなかつた切嗣は黒鍵が飛んできた方向に目を向けた。

「逢いたかつた……逢いたかつたぞ、衛宮切嗣」

「……言峰 綺礼」

## 第十話 マスター達の三角関係にて（前書き）

十話です。

ちょっと体調崩してまとめるの」「手間取ってしまった。

## 第十話 マスター達の三角関係にて

ヒーロー……とこう表現がある。

それは様々な定義づけがされるものの、万国共通で用いられる手法に『ピンチに颶爽と駆け付ける』とこうものがある。今の綺礼のポジションが正にそれだろう。

沈黙が降りる中、フォックスは状況のマズさに歯噛みしていた。よりもよってこのタイミングで……。ラスボスだろお前はと盛大にツッコミたい。

「私は神というものを特に信じたことはないが……」

屈強なガタイを神父服で包んだ代行者は歩を進める。その恍惚とした表情は、万年仏頂面の彼と同一人物とは思えない。

「今ならば神を信じ、そして心からの感謝を捧げることが出来る。こんなにも早くお前と巡り合わせてくれるとはな……。最も、邪魔者もいるようだが……」

チラリ、と綺礼はフォックスを一瞥するが、すぐに切嗣に向き合つ。

「衛宮切嗣。この瞬間をずっと待つていた。お前と対峙できぬ時の……。教えて欲しい……お前は九年前、何を掴んだのだ？」

切嗣はこの男の言つていることが理解できなかつた。九年前と言えば自分がアインツベルンに招かれたことだらうが、どうも要領を得

ない。

「時臣師はお前のことを金銭目当てのフリーランスと言っていた。金のためならどんな悪辣な手段も平然と行える外道だと。だが…それは断じて違う。お前は”答え”を求めてあのような苛烈な戦いを続けてきたのだろう?そしてソレを見つけた。違うか?」

まるで縋る様に問いかける綺礼を訝しげに見る切嗣。この男は何を言つている?

「さあ、教えてくれ!戦いの果てに、アインツベルンとの邂逅の果てに、お前は何を掴んだのだ!?お前はそれを知るためにあるような形で巡礼を続けたのだろう!?そして”答え”を得た!これを問うためだけに私はこんなくだらん鬭争に身を投じたのだ!!」

言峰綺礼は、父親と同じ敬虔ではあっても狂信者ではない、というのが周りの認識である。だが今の綺礼は明らかに狂っていた。いや、慟哭というべきなのかもしれない。

自分を救える……その可能性を持つただひとりの男への渴望。何一つとして価値を見いだせなかつた自分の歪みを、その正体をきつとこの男は知つている。

期待に身を躍らせる綺礼への返答は、別方向からの投擲だった。

先程自分が放つた黒鍵。それが再び刀身を編まれ、無粋な輩の手によつて持ち主に牙をむいた。

人体を貫く威力のそれを、綺礼は難なく躱すが、その顔は対話を中断されたことによつて親の敵でも見るかのように歪んでいた。

「ふむ、惡々しい」とこの上ないが、このままではやつくり問答もできんのは事実か……」

言い放つと綺礼は即座に黒鍵を両手に構え、切嗣を庇う形で立ち位置を変える。

「衛宮切嗣、ここはひとまず共闘しよう。私にはお前が必要なのだ。ここでもさむざ敗退するところは許容し難い。もしこの場を生き残れたら、一度だけでいい……私との対話の機会を望む」

「……いいだろ？ お前が何を言いたいのかはまだはつきりしないが、生きていたらそれくらいの時間は割り」

この男が、何故自分にこれほど強烈な執着を見せるのかはわからぬ。だが明らかに、言つてこるところが心からの本心だということはわかる。

既に固有時制御は使えない……ならば精々利用させてもらおうとうのが切嗣の結論だった。

その返答に綺礼は歓喜に満ちた表情で”敵”に向き合つ。当然だが笑いながら武器を向けられているフォックスにとつては、気持ち悪いことこの上ない。

余談だが、この邂逅は綺礼にとつても全くの偶然に近いものだった。

港場での戦いから、ランサーに傷を負わされたセイバーの陣営である衛宮切嗣が、すぐさまランサーのマスターであるケイネスを排除

すべく何らかのアクションを起こすのは彼にも容易に推測が付いた。

故に綺礼はケインズの拠点の周りに複数のアサシンを置き、自身も教会を抜け出して切嗣が待機していると思われる建設途中の高層ビルで網をはつていたのだが、途中アサシンの一體が切嗣とフォックスの戦闘を発見したことを伝えてきたのだ。

この報告に綺礼は脱兎の如き勢いで戦場であるビルに向かい、現場に駆けつけ今に至る、ということであった。

言峰綺礼……衛宮切嗣が、そしてシルバー・フォックスが今回最も危険視している男。故に、即座に迎撃に移ったフォックスだつたが状況は最悪な方向に走っていた。原作最凶の仇敵であるこの二人が手を組むという……まるで悪夢のような光景だ。

だが、この場から退くというのも彼の選択肢はない。

何故この男がここにいるのかはわからないが、これはチャンスだ。言峰綺礼はフォックスの中では最優先の排除対象の一人。教会に匿われていては手が出せないが、こうして自分から出てきたのであれば遠慮なく始末できる。何より、この男にはまだ”覚醒”してもらつては困るのだ。

もしこの衛宮切嗣との早すぎる出会いが、綺礼に自分の本質を気付かせるキッカケにでもなつたら最悪の結果だ。それほどフォックスにとつて有利な状況では無いが、是が非にでもここで仕留めておきたい。

自身のサーヴァントは儀式の準備中で呼び出せないが、綺礼もアサ

シンを呼ぶことはできないだろう。既に消滅したということになつてているのは周知の事実であり、そもそも教会に匿われている彼がこうして出てきたこと自体問題なのだ。最もいざとなつたら切嗣のために呼び出すかもしないが、軽率なマネは出来まい。

かくして、戦端は開かれた

先手は綺礼。両手に三本ずつ構えた黒鍵を一気に投擲する。

黒鍵は聖堂教会代行者の基本装備のひとつだが、扱いが難しいため、完璧に使いこなせるのはほんの一握りしか存在しない。綺礼はその数少ない使い手の一人であり、その腕は若くして達人の域にあつた。

対してフォックスの判断は突貫。

小銃と違つて黒鍵は広く弾幕を張れない。故にフォックスは全高が50cm以下になるまで体勢を低く落し、そのまま豹の如き勢いで綺礼に迫る。

接触と同時にフォックスは斬撃の嵐を繰り出すが、綺礼は持ち前の八極拳の腕前でそれらを何とか凌ぎきつた。だが、完全に防御に専念しても全てを防ぐことはできない。既に綺礼は、浅いが二十近い傷をその身に負っていた。

だがフォックスも止めまでは刺せなかつた。今の攻防の隙に移動した切嗣が、絶妙のタイミングで援護射撃をしたからだ。

咄嗟に銃弾を避けたフォックスだが、今度は綺礼の反撃だった。抜き打ちの如き勢いで、四本の黒鍵を投げ放つ。

慌てずに命中する分の黒鍵をフォックスは切り落とすが、そこに付加された威力は絶大で、僅かだが腕が痺れる。

体勢を立て直し、改めて接近して討ち取ろうとするフォックスだが、綺礼は近接戦ではあくまで防御と回避に徹し、致命傷だけは避けるように斬撃を受け流す。それでも通常なら、数秒も持たずに首をはねられるだろうが、共闘関係にある切嗣の絶妙な援護でフォックスは仕留めきれないでいる。原作最悪の相性を誇るこの二人のコンビネーションは、即席とは思えないほど息がピッタリだつた。

しかしここで進展があつた。これまで接近戦では一切攻撃してこなかつた綺礼が、突如拳打での反撃を繰り出してきたのだ。

代行者たる綺礼のパンチは文字通り凶器である。故にフォックスは拳ではなくその手首を掴み、背負い投げの要領で綺礼の巨体を投げ飛ばした。

特大の人間砲弾と化した綺礼は、叩きつけられた壁を一つほどぶち抜き倒れ伏した。すぐさま立ち上がるがその表情には苦痛が窺える。骨と内蔵は筋肉に守られて無事だったが、それなりのダメージを負つたのは間違いない。

だがこれこそが、綺礼の捨て身にして最大の策だった。今の一瞬の動作で生まれた隙を、切嗣が見逃すはずがない。

気がついたときには既に魔弾は放たれていた。剣を持つていな

投げた方の左腕。空となり動きを止めたその肘へと『起源弾』は命中した。

勝った おそらくそれは切嗣だけでなく綺礼も抱いた感想だつただろう。だがフォックスの行動はさらに彼らの想像の斜め上をいつた。彼とて被弾してからの対策を考えていなかつたわけではない。

着弾とほぼ同時 いや、僅かに速くフォックスは左腕を切り落とした。

この行動には切嗣だけでなく綺礼も一瞬だが驚愕の表情を浮かべた。毒が廻る前にその部位を本体から切り離せば、体全体への影響は避ける。胴体や脚に着弾すればこの手は使えないが、今の動作で停止した左腕を狙つてくるのは予想がついていたため、こうして不発にすることが出来たのだ。

フォックスはたとえ腕一本を無くしても、六秒もあれば自己再生が出来る。故に治るまでの時間を稼ぐべく一人から距離をとつたが、それは完全な……この場の誰も予想できない誤ちだった。

次の瞬間 ビル内は爆発に包まれた

「ハツ…ハツ…ハツ……」

既に切嗣は戦場から離脱していた。

あの時室内に撃ち込まれた爆発は、彼の相棒 久宇舞弥が援護として放つた、携行式地対地ミサイル FGM-148 ジャベリンによる一撃であつた。

あの『死徒殺し』があの程度で死んだとも思えないが、こうして追つて来なかつたところを見ると、それなりの深手を負つたのは間違いないだろう。

ここならば安全。そう判断出来る所まで逃げきつた切嗣は、暫く呼吸を整えることに専念した。

「切嗣！」

近づいてくるのは舞弥だ。常に無表情の彼女が、わかりやすく焦りの顔を見せていく。

「ありがとう舞弥。助かつた」

「いえ、それより一刻も早く治療を……」

舞弥の言つ通り、今の切嗣の身体はボロボロだった。

固有時制御の連発に加え、言峰綺礼と共に闘しての連戦……。さらにここまで逃げてくるのにもかなり全力で走り続けたため、肉体の消

耗は激しい。すぐに休息と治療が必要だ。

「舞弥、ひとまず例の一一つ目の拠点で傷を癒す……。君はアイリとセイバーの所に向かい、事情の説明を頼む」

「了解しました……」

予定外の戦いでダメージを負ってしまった。ケインス・エルメロイ・アーチボルトのホテル倒壊が上手くいったのはせめてもの僥倖だったが、まだ生死の確認は出来ていない。もし死んでいなかつたら新たに対策を立てる必要がある。だが切嗣はすぐに頭を切り替えることが出来なかつた。

言峰綺礼……あの男が自分に見せた、異様な執着……。そして投げかけた言葉……あれが今も切嗣の耳朶に残つていた。

『何を掴んだのか……』

その意味はある場では理解出来なかつたが、今改めて咀嚼すると、どことなく心当たりが無いでもない。

一人でも多くの命を救うため、考えうる限りの……それこそ外道の一文字でしか形容しようのない手段も使って、切嗣は生命の救済行為を続けてきた。

そして九年前、アインツベルンに雇われマスターとして招かれ、人類最後の流血とすべく挑むことを決めた聖杯戦争……。果たして言峰綺礼の問いかけの意味とはコレだったのだろうか……。

黙考を続けながらも切嗣は、やることをやるべく拠点のひとつである武家屋敷へと向かっていった。

「グッ……一歩間違えたら死んでたかも……」

瓦礫の中から這い出でてきたのは……勿論フォックスである。その身体は両腕が途中から無くなり、内臓のいくつかがはみ出て、火傷からはジュー・ジューと焼肉の様に煙を出している。

だが数秒後には、巻き戻しのよつた速さで腕が生え、内臓も引っ込み、細身ながらも鍛え上がった綺麗な身体がそこにあつた。治ると同時に半裸状態となつた服を、魔術で修復する。

あの時咄嗟に弱点である頭部だけは守つたが、正直死ぬかと思つた。まさか歩兵式ミサイルを撃ち込んでくるとは……。

完全に廃墟と化したビルの中で、フォックスは己の失態を悔いていた。衛宮切嗣を逃がし、言峰綺礼を仕留めそこねた……何が『死徒殺し』か。

『「主人様、『無事ですか』?』<sup>マスター</sup>

ふと、キャスターからの念話がはいる。といつことは儀式の準備が出来たということか。

「ああ大丈夫、これから帰宅するよ。田舎は果たせなかつた…すま  
ない」

『いえ、御無事ならそれで何よりです。あと、例のマスターの男性  
がそろそろ起きそうですよ』

「分かつた。なら帰つて交渉に移るとするよ」

成果は出せなかつた。だが一歩前進もしている。帰つてあの男  
間桐雁夜が要求に応じれば、かなりの光明となるはずだ。

民衆が爆発を嗅ぎつけない内に、フォックスはビルを去つていつた。

## 第十話 マスター達の三角関係にて（後書き）

すみません。綺礼が鉄甲作用使つてるシーンがありましたけど、あれって埋葬機関の秘伝だから違いますよね。訂正しました。

## 第十一話 王と神父の問答にて（前書き）

十一話です。

今回も、ほぼ原作そのままの流れです。

## 第十一話 王と神父の問答にて

吉峰綺礼は上機嫌だつた。

あの戦いの後、綺礼はすぐに冬木教会へと帰還し、時臣から教会を抜け出たことを詰問されたが、小つるさい間諜に目をつけられたため、やむをえず自らの手で始末したということ言い訳をつけた。弟子として限りない信頼を綺礼に向いている時臣はそれをあつさり信じ、特に深い追求もせず今後の注意を呼び掛けるだけにとどけた。

師匠に無断で外出をし、なおかつ嘘をついた形の綺礼だが、罪悪感のようなものは毛ほども感じていなかつた。それだけの成果があつたのだ。

表情にこゝを出さないが、口約束だけでもあの男に対話の約束を取り付けられたのは、綺礼にとつて大きな収穫だつた。恐らくこれからも勝手に教会を抜け出すことになるだろうが、"答え"を得るためにそなことは些細な問題だ。何としても、衛宮切嗣ともう一度会わなければ……。

(今後は衛宮切嗣と再び見えるのが至上命題だが、場所が分からなければどうしようもない。アインツベルンの古城は結界が張られて容易には近づけんし、あの傷では暫くは動けんだろう。……となれば、ひとまずはアサシンの情報収集に徹しておとなしくしているのが賢明か。余り不用意に教会を出るのも得策とは言えな……ん?)

思考を続けながら綺礼はふと違和感に気付いた。

教会にあてがわれた自分の部屋。その扉が僅かに開き、隙間から華やかな雰囲気を醸し出している。

訝しみながら中に入る綺礼だが、原因はすぐに見つかった。

「アーチャー？」

黄金の頭髪にルビーの如く輝く双眸。さらに神の血が混じった人があらざる美貌は、時臣のサーヴァント アーチャーことギルガメッシュである。その姿は普段のオールゴールドな甲冑ではなく、エナメルのジャケットにレザーパンツという現代風の服装だが、全身から発せられる黄金の王氣は、質素であるはずの綺礼の私室を煌々と照らしていた。

「ふむ、別段天上の美酒とまではいかんが、僧侶の倉で腐らせておくには勿体ないものばかりだな」

そう言いながらアーチャーは勝手にキャビネットから引つ張り出した綺礼のワインを批評する。

不法侵入に加え、私物を物色しているこの英雄王に綺礼は何やら早々に諦めの念を感じていた。単独行動スキルに物言わせてあちこちに出向いているというのは時臣から聞いていたが、まさか自分の部屋にやつてくるとは……。

「一体、何の用だ？」

硬い口調で問うと、アーチャーは利き酒を中断して意味ありげな視線を綺礼に向ける。

「退屈を持て余している者が、我の他にもござつたのでな」

「退屈?」

その言葉の意味に綺礼はすぐ得心がいった。何故かは不明だがこのサーヴァントは、綺礼が時臣の意にそぐわない行動をとつたことに気付いてござつた。

「どうなのだ綺礼とやら?お前も、あの時臣に奉仕するばかりで心満たされていいるわけではないのだ?」

「……今更契約が不服になつたのか?ギルガメッシュ?」

綺礼は時臣のようにアーチャーに臣下の礼はとつていない。いくら人類最古の英雄王といえど、時臣のサーヴァントであるという事は間違いないのだから、時臣の弟子である自分と比べてもせいぜい同格の立場がいいところだろうと綺礼は考えていた。

そんな綺礼の態度にアーチャーは特に機嫌を損ねた様子もなく酒を呷る。

「<sup>オレ</sup>我を招いたのは時臣だし、この身の現界を保つていての時臣の供物によるものだ。そして何よりも奴は臣下の礼をとつていろ。まあ、答えたやうなわけにもいくまい」

意外に律儀な発言に綺礼は内心で少々驚いた。どうやらこの時は、礼を忽くす相手に報いてやるへりの情はあるらじ。

「だが正直、あそこまで退屈な男とは思わなんだ。万能の願望器を以てして『根源の渦』に至る、だとつづくまらん企てがあつ

たものだな」

マスターの悲願を一蹴する発言に綺礼は嘆息するが、同時にその気持ちも僅かに理解できた。

「『根源』への到達は魔術師固有のものだ。あれは部外者がとやかく言えるものではない」

「そういうお前も部外者だそうだな綺礼。 しかも聞くところによれば、本来は魔術師共とは対立する立場にあるそうではないか」  
派遣という形ではあるが、綺礼は時臣の弟子である。この教会の人間でありながら魔術師という複雑な立場の話は、アーチャーの耳にも入っていた。

「『根源』に至る、ということは、すなわち世界の”外側”に逸脱するということだ。それによって”内側”のこの世界に何か影響が出来るわけでもない。だから”内側”的視野しか持たない教会にひとつは魔術師の企てはつまらないものとしか映らない」

「成程な。確かに我<sup>オレ</sup>は、我<sup>オレ</sup>の庭たるこの世界以外は何の興味もない。  
『根源』とやらにも関心は湧かぬ」

確かにかつて世界の全てを手に入れたこの王からすれば、つまらないの一言だろう。改めて考えると、魔術師の鑑である時臣とのアーチャーの相性は最悪の部類かもしれない。

「もし冬木の聖杯が『根源』に至るためだけの装置なら、聖堂教会は放任していただろう。だが不幸にも聖杯は”万能”であった。世界の”内側”をも無限に改変しうる可能性を持つ、正に我々にとつ

ては極めつけの異端だ。だからこそ教会は遠坂に肩入れした。万能の願望器を”無意味でつまらない”用途に使い潰してくれるのならそれに越したことはないからな。もっとも私の父には、それは別の私情もあるようだが

「では時臣以外のマスター共は、また違った動機で聖杯を求めてい るといふことか？」

「時臣師は魔術師の典型であると同時に最右翼だ。今日田、あれほど純粹に魔術の本道を貫いている者はそうはないまい。他の連中が求めているのは総じて浮世の名利であろうよ。威信、欲望、権力、……すべて世界の”内側”に完結する願いだ」

「結構ではないか。どれも我が愛するものばかりだぞ

「お前」（）とは俗物の頂点に君臨する王だつたな。ギルガメッシュ

そんな綺礼の評価にアーチャーは不敵に笑い、グラスのワインを飲み干す。

「そういうお前はどうなのだ？綺礼、お前は聖杯に何を望む？

「私が？ 私には……別段望むところなど、ない

突然の質問に虚をつかれた形の綺礼は、迷いを含んだ口調で返答した。その様子にアーチャーが妖しく笑みを浮かべる。

「それはあるまい。聖杯は、それを手にするに足る者のみを招き寄せるのではなかつたか？」

「そのはずだ。が……私にもわからない。成就すべき理想も、遂げるべき悲願もない私が、何故この戦いに選ばれたのか？」

その問いは綺礼もずっと考えていたことだった。聖杯への願いもなく、魔術師ですらない自分が何故あれほど早くに令呪を宿したのか……。

戦いに臨む意義といつものはある。衛宮切嗣との対話……綺礼が求めるものと言えばそれくらいだが。

「それは迷つほどいの難題でもあるまい。理想もなく、悲願もない。ならば愉悦を望めばいいだけのことではないか」

「馬鹿な……」

叫んだのはほとんど反射的なものだった。

「神に仕えるこの私に、よりもよつて愉悦などい堕落に手を染めよといつのか？」 そんな罪深い

「ククク、これはまた飛躍だな、綺礼。何故愉悦が罪と結びつく？」

「それは……」

返答に窮する綺礼。同時に、何故自分はこれほど声を荒げたのか解らず押し黙る。

そんな綺礼の狼狽にアーチャーは面白そうに話を続ける。

「なるほど悪行で得た愉悦は罪かもしれん。だが人は善行によつて

も喜びを得る。悦やのものが悪であるところは、一體どうして理

屈だ?」

何故この程度のことと言ふ返せないのか綺礼は解らなかつた。同時に、ただでさえ空虚な自身の心にまた新たな空洞が生まれたような気がした。

「　　愉悦もまた、私の内にはない。求めてはいるが、見つからない」

搾り出すよつて答えたその声には自信が感じられない。そんな綺礼の様子に益々アーチャーは興味深そうな笑みを浮かべる。

「ふむ、綺礼よ。じつせりお前は、まずは娛樂とこうもの知るべきであろううな」

「　　娛樂　　だと?」

「やうだ、お前はまだ己の魂の在り方が見えていない。だから愉悦を持ち合わせておらんなどと抜かすのだ。……そうだな、手始めに我的娛樂に付き合つところから始めてはどうだ?」

「今私のには、遊興に費やしていられる時間などない……」

「まあやうづきうな。何、時に課された任務の片手間に出来ることだ。綺礼、お前は他の五人のマスターに間諜を放つのが役目であろう

うづきうな」

「……確かに、さうだが」

「ならば連中の意図や戦略だけでなく、その動機についても調べ上げるのだ。そして<sup>オレ</sup>我に語りきかせる。造作もないことであるう。」

確かにその程度なら、監視担当のアサシンに追加事項として言い含めておけば十分可能だう。

「しかしアーチャー、そんなことを聞いてどうするといつのことだ？」

「言つたであろう<sup>オレ</sup>、我<sup>オレ</sup>は人の業を愛する。条理を捻じ曲げ、奇跡にまで縋ろうとする度し難い願望の持ち主が五人も雁首を揃えておるのだ。しかも内一人は英靈ともやりあつような輩もあるのだう。ならば一人か二人くらいは面白みのあるやつが混じつているさ。少なくとも時臣よりは幾分かマシであるうしな」

綺礼はしばらく熟考した。依頼 자체はそれほど難しいものではない。ならばここで請けてこのサーヴァントに何らかの影響力を持つておければ、将来的に自分たちの陣営にプラスに働くかもしれないと結論づけた。

「……いいだろうアーチャー。請け負つた。ただし、それなりに時間はかかる」

「構わぬ。気長に待つとする。ああ、そう言えばもう一つ。綺礼よ、例のサーヴァントとやりあつたマスターについて教える」

突然の話題転換に綺礼は面食らつた。だがアーチャーは構わず進める。

「例の男……たしか『死徒殺し』とか言つたか？時臣が言つには魔

術師どもよりもお前たちの方が詳しいそうだが「確かに……彼は教会ではそれなりに有名人だ」<sup>教会</sup>

『死徒殺し』シルバー・フォックス。彼を一躍有名にしたのは、やはり四年前の、例の二十七祖クラスの死徒を単独で葬った件だろう。あれ以来教会は彼に仕事を依頼することもあり、代行者である綺礼もその名前は聞いていた。もつとも、直接見たのは今回が初めてだつたが。

「だがアーチャー、何故お前が彼のことを見にする？」

「何、聞くところによれば奴は人間でありながら宝具とも打ち合える武器を持っているそうではないか。ならばもしかすれば我の宝物庫に加える価値があるかもしれません。綺礼、そのへんも追加で調べておけ」

言つだけ言つとアーチャーはさつさと部屋を出ていった。一人取り残された綺礼は、また妙なことになつたものだとため息を吐き、同時に、あの傍若無人が固まつて出来たような男に目をつけられた『死徒殺し』に、少しばかり同情した。

## 第十一話 交渉と園根の上手（前書き）

お待たせです。

心理描写って難しそうな……あんまり上手くまとまらなかつたかも  
……。

## 第十一話 交渉と屋根の上で

「…………知らない天井だ…………」

よくある転生ものの主人公のよつなセリフで目を覚ましたのは、間桐雁夜 今回の間桐陣営の参加者にして、バーサーカーのマスターである。

徐々に意識が覚醒していくが、同時に言ひようのない不安感が襲ってくる。寝ているのは普通のベッドだが、周りに結界のよつなものが張られて出られない。ここは何処だ？

（見た限り普通のアパート風の部屋だけ……俺の知っているところじゃない。そもそも俺はどうしたんだっけか……）

落ち着いて雁夜は記憶を探つていく……そして思い出すのは港場での戦い。バーサーカーに魔力を供給させるために活動した刻印虫の反動で動けなくなつたところで、突然意識が途絶えた所までは覚えている。

…………とこいつとは、いじはまさか！？

「あー、目が覚めましたか！？」

鈴のような可愛らしい声で叫んだのは、キャスター。その姿は雁夜も確認済みだ。

本能的に飛び起きようとするが、突如全身に激痛が走る。

「あんまり動かないで下さい。まだ完全に治癒は済んでません。それにこの結界からは出られませんから、無理しない方がいいですよ」

「…………」

「…………」

「だから動かないで下さい。もつすぐじ<sup>マスター</sup>主人様が帰ってきますから、その時に説明します……」

「来ましたね」

キャスターの言う通り部屋の扉が開かれ、一人の青年が入ってきた。シルバー・フォックスである。いつもは結ばれているその長髪も、今は降ろされていた。

「ただいまキャスター。それと、起きたか間桐雁夜」

「キャスターの……マスターか？」

「最悪だ……。敵のマスターに自分が囚われている。これがどのような意味を持つかわからない雁夜ではない。

「一応言つておくが、令呪を使ってバーサーカーを呼んでも無駄だ」

その通りだろうと雁夜は出かかった舌打ちを抑える。

まだバーサーカーは、ライダーに受けた傷が治つていまい。呼び出しても戦えない。それ以前に令呪を使う暇さえ<sup>『』</sup>えてはくれないだろう。

ならば何故こんな状況になったのかを訊くのが、雁夜のやるべきことだ。

「……何処だ？」

「俺たちの拠点の一つだ。港場での戦いの後にお前を捕まえて、ここに連れて来させてもらった」

「どうやつて……俺を見つけたんだ？」

刻印虫を疑似魔術回路として体内に寄生させ、無理やり魔術師となつた雁夜は、ただ魔力を生成するだけでも、体内を暴れ狂う虫によつて死ぬほどの激痛を味わう。さらに使える魔術も、間桐の虫をいくつか操れるだけというお粗末極まりないもので、そんな彼がサー・ヴァント同士の戦いでマスターとして前線に立つてもまともに戦えるはずがない。それ以前に雁夜のサー・ヴァントは制御がまるで利かないバーサーカーである。よつて雁夜は、戦いはバーサーカーという狂戦士に好きなように暴れまわらせ、自身は敵と遭遇しないよう身を隠すことに専念するという戦術をとつていた。

実際港場でも終始下水道に隠れて見つからないようにしていったというのに、どうして出てきた自分をピンポイントで発見できたのか、雁夜にはまるで見当がつかなかつた。

「キヤスターがバーサーカーに炎を撃つただろ？あの時魔力の供給先を示す発信器のようなものをバーサーカーにつけさせてもらつた」

フォックスのプランにバーサーカーは必要不可欠な存在だが、手に入れるためには本来のマスターである雁夜の協力がどうしても必要

になる。ところが隠身に徹している雁夜の行方は調べてみてもさっぱりだつた。そのために、わざわざ戦闘が苦手なキャスターを伴つてあの場に現れたのだ。

「取引だ、間桐雁夜。バーサーカーのマスター権を俺に譲渡しろ。その代わり間桐桜の救出と、間桐臓硯の殺害を引き受けよう。」「何だつて？」

その言葉に雁夜は虚をつかれた。

バーサーカーの譲渡というのはまだわかるが、今この男が言ったのは彼が聖杯戦争に参加した理由の一つ。何故それを知つている？

「お前のことは調べさせてもらった。間桐の魔術を嫌つて家を出たものの、代わりに遠坂家から養子として来た桜という少女を開放すべく、僅か一年で無理やりマスターとなり、聖杯を間桐臓硯に持ち帰ろうとしている、だつたか？」

その説明にはほぼ間違ひはない。どう調べたのかはわからないが、この男はかなり自分の事情を把握しているようだ。

「何が…目的だ？」

そう問わざにはいられなかつた。桜の救出と臓硯の抹殺、二つとも雁夜の悲願と言つてもいいことだが、何故それを引き受けるなどと、人助けのようなことを言つのか。この男も魔術師であるのならあまりにもらしくない提案だ。

「出来れば自主的にアンタの協力を得たい。それに間桐臓硯には個

人的にも用があつてな、元々間桐邸には乗り込むつもりだった。間桐桜の救出は……まあ、報酬兼若干お節介つてとこだな。信じるは否かは任せるが、条件自体は破格だと思つてゐる

「だが、あの妖怪を……」

「俺たちの実力は、もつ見せたはずだが

確かに見た。槍兵のサーヴァントと渡り合ひスマスターと、魔術師の英靈ともなれば間桐の結界も大した意味は成すまい。臓硯を殺すのも難しくないかもしけない。だが……

「無理だろう。知つてるかもしけないが、俺の体には臓硯の刻印虫が埋め込まれている。いつしてお前らと話していることも、アイツには筒抜けのハズだ」

「ああ、それなら大丈夫だ。今お前が寝てるベッドの結界……これはキヤスターが張つてくれたものなんだが、これでお前と臓硯のリンクを断つている」「

その返答に雁夜は驚く。どうやらこのペアは随分と用意周到に準備をしているらしい。ならば答えはほぼ決まりだろう。確かに交渉の内容は雁夜にとってありがたいものばかりだ。本當か嘘かはともかく、どの道こうして敵の拠点に連れてこられた以上、自分に断る要素は無い。

「いいだろう、取引に応じる。だけどこちらからも条件がある。まづ、バーサーカーを渡すのは桜ちゃんの救出と臓硯を殺すのが終わつてからだ。それと、桜ちゃんの身の安全を保証しろ」

「わかつた。しかしアンタも大した人だな。ここで自分ではなく女子の心配をするとは」

「別に死にたいわけじゃない。単に優先順位の問題だ」

実を言うと雁夜にはもう一つ目的があった。桜の本当の父であり、彼女を養子に出した遠坂時臣への復讐である。出来れば……いや何としてもあの男に一泡吹かせてやりたかった。桜を闇桐に差し出し、その末に彼女が味わった地獄の苦痛と現実を叩きつけてやりたかった。

だがそれでも、やはり桜を助ける方が雁夜にとっては重要事項だった。この契約の末に自分の命があるかどうかはわからない。それであの子と約束したのだ。凜と葵にもう一度会わせてあげるとそこに自分はいないかもしれないが、命を賭けるだけの価値はそれだけで十分ある。

「交渉成立だな。ならば早いほうがいいだろ？ アンタを連れてきてもう丸一日経つてるから、あの御老人も不審に思つてはいるに違いない」

「……何だつて？俺はそんなに寝ていたのか？」

「ああ、ここに運んで出来るだけの治療を施したが、一向に目覚めなくてな、もうダメかもと思つたぞ」

正直なところ確保した時の雁夜の状態は、治癒魔術に優れたフォックスから見ても死にかけもいいところで、何で生きているのか不思議なくらいだった。そのまま放置していればおそらく半日も持たなかつただろう。計らずも雁夜は誘拐犯によつて生きながらえた形だ

つた。

「間桐邸には俺とキャスターで殴り込む。アンタはこのアパートでおとなしくしていってくれ。その傷では動けないからな。代わりにあの屋敷の結界や罠について知っているだけの情報がほしい」

「わかった……それじゃあ……」

（今夜も異常は無いか……）

月明かりに照らされた深夜、フォックスはアパートの屋根の上で周囲を見張っていた。

闇夜でも遙か遠くまで見渡せる彼は、魔術による視力強化もあればアーチャー並みの範囲を視認できる。それ故、こうして夜に一度屋根に上がり警戒をするのは聖杯戦争では日課となっていた。

「お疲れ様です。ご主人様<sup>マスター</sup>」

すぐそばに靈体化していたキャスターが現れた。その姿は月光を浴びることで幻想的な美しさを放っている。雰囲気が自然と調和しているように見えるのは、やはり彼女が日本の英靈だからだろうか。

「彼は？」

「もう寝ちゃいました。やっぱり疲れきってたみたいですね」

無理もないだろ？。あれから打ち合わせは滞り無く終えたが、身体は完治しておらず、しかも一時的に協力関係にあるとはいえ、ここは敵の本拠地である。本心ではいつ寝首を搔かれるか不安でしょうがないはずだ。肉体面だけでなく精神的にもピークに達していただろ？。

「『<sup>マスター</sup>』主人様、何かお悩みですか？」

ふいにそんなことを訊いてくるキャスターに、フォックスは軽く驚いた表情になる。

「顔には出さない様にしてつもりなんだが……」

「甘いですよ』<sup>マスター</sup>主人様。殿方が何を考えているかぐらい、私にはお見通しです 」

そう言われてフォックスは己がサーヴァントの伝承を思い出す。

普段のノリの軽さから忘れがちになるが、生前のキャスターは大変な博識の持ち主でもあったといつ。天下一の美しさと、天下一の聰明さ……この二つを兼ね備えたのが「玉藻の前」であり、それ故に仕えた鳥羽上皇からの寵愛も非常に深いものだつた。そして富中の奥深くで女官として過ごしていた彼女なら、相手の考えていることぐらい顔を見るだけで看破するのも朝飯前だろ？。

「……少し考えていた。俺がこの聖杯戦争に参加したことにして……」

屋根に腰を下ろし、フォックスは滔々と語り始めた。キャスターも隣に腰掛け、主人の言葉に黙つて耳を傾ける。

「令呪がこの手に宿つて……前世でのことを思い出して……俺は戦いに身を投じた。汚染された聖杯をなんとかするために。だが、本当にそれでよかつたのか？それがわからないんだ……」

「……どうことですか、ご主人様？貴方の行動は間違いなく多くの命を救うことになります。そのために参加したご主人様の意思が間違つてゐるなんて……」

「キャスター、俺は君が思つてゐるほどまともな人間じゃないんだ……」

自嘲気味にフォックスは答える。

「確かに大災害は防ぎたいし、この馬鹿げた殺し合いを解体したいという気持ちは嘘じやない。だがな、その程度の理由でこの戦争に参戦する気になつてしまつたのが問題なんだ」

人は誰でも自分の欲望のために動いていて、それが魔術師ならば尚更だ。フォックスも決して理由なくしてこの戦争に参加したのではない。前世の故郷の……結末を知つていたから何とかしようと思った。それは世間一般で言う”人助け”だろう。

フォックスは魔術は使つても魔術師ではない。目的のためには手段を選ぶ。自分の良心と矜持が最も納得できるものを。そういう意味ではかなり人間的だ。だがこれでは、命を賭ける理由としてはあまりに希薄で軽すぎるだろう。それなのに平然と参戦している。

「俺は理不尽に死なないためにこの能力を選んだ。だがそれは、かえつて俺が歪む原因になってしまった」

肉体再生能力<sup>ヒーリング・ファクター</sup>は精神をも最適化する。それ故にフォックスは、恐怖という感情が普通の人間に比べて著しく欠けていた。いや、恐怖を感じないのでない。感じてなお、乗り越えられるようになってしまっていた。

これまで多くの戦いを経験した。だがどんなに吐き気を催す光景を見ても、それが彼の精神の許容量を超えることは無かつた。血肉が飛び散り、腐った死体が食屍鬼<sup>ケル</sup>となって襲いかかって来ても、眉をひそめることはあっても怯むことは無かつた。どんな絶望的な状況でも、吐くことも、膝が震えることも無かつた。しかもそれが初陣の時の話なのだから、異常としか言えない。

そんなあまりにも都合がいい、ある意味完成した精神<sup>リラックス</sup>。だがそれは経験によるものではない。

能力によって自動的にパニックを抑制し、コントロールする。ルーキーでありながら歴戦の戦士と同じように戦える。それは人間ではなく、機械と言えるのかもしれない。

「死にたくない……という気持ちは間違いなく本物だ。だが死ぬのが怖いか?…と聞かれれば、上手く答えられない」

そもそも本当に死にたくないのなら、聖杯戦争など参加するべきではないのだ。それなのに参加してしまった。前世の知識を活かし、あの大災害を防ぎ、少しでも良い結末を迎えるために。

自分がお人好しなところがあるというのも自覚している。だがそれ

でも、これは違う気がする。

樂観的に考えているわけではない。危険性は十分理解しているし、最悪自分が死ぬ可能性も考慮している。それでも、リスクを鑑みてなお闘争に身を投げる。

まともな人間なら、それは愚かと言うか、あるいは恐怖を乗り越えてなお挑む勇者という評価をするかもしない。だがフォックス自身はそのどちらとも違うだらうと考えていた。

「いや、もしかしたら俺は英靈きみたちに会いたかったのかもしれない。一度死んで、仮初とはいえ一つ目の命を与えられた君たちなら、こうして転生を果たした俺の本心を打ち明けられるかもと……」

もしそうなら、それはほとんど無意識の内に求めていたものなのだろう。この世界での生活に不満のようなものは感じていない。だが、唯一真相を知っていた師匠は死に、本当の意味で自分をわかつている者はいなくなつた。じつちの両親にさえ嘘をつき続けていたのだ。

それが願いなら、叶つたのだろう。自分には過ぎた…事情を知つてなお協力してくれるパートナーを得ることができた。単に理解者が欲しかつたのだとすれば、それは自分の小ささを自分で証明したような気分になる。

「ご主人様は罪の意識も感じるし、その責任も背負う覚悟をもつて戦いに臨んでいるのでしょうか？なら誇つていいと私は思いますよ」

突如、今まで黙っていたキャスターが口を開いた。

「確かにご主人様には矛盾があります。死にたくないのに、回避で

きる闘争に身を投じる… それも人助けのために。いくら事前の知識があるからって、ここが前世の故郷で愛着があるからって、それだけで恐怖も乗り越えて戦うご主人様は異常なのでしょう。でも、私に言わせれば最高の理由ですよ」

微笑を浮かべ、これまで一番真剣に話すキャスターに、フォックスは目が離せなかつた。

「ご主人様はご自身の理由が、戦う目的としては薄すぎると思つてるのでしようけど、私たつて、ただ呼ぶ声がしたから召還に応じて出てきたつてだけです。私の願いは人に仕えることです、それはその人の行動が最終的に善いものである、と感じた方だけです。だから私はご主人様に全力で仕えるんです。貴方がどう思おうと、周りがどう言おうと、ご主人様のやろうとしていることはきっと正しい。胸を張つていいものだと、それは私が保証します。ご主人様が何者であれ、人として何かが壊れても、それは私がご主人様を見捨てる理由にはならないんです。だから最後までお側にいさせてください……」

語り終えると同時に寄り添うキャスターを、フォックスはじつと見ていた。

同時に自分の小ささに改めて嘆息した。この程度のこととウジウジ悩んでいたとは……

パンツ！と軽快に音が鳴り響く。それは気合を入れ直すべく頬を叩いた音だつた。

「そうだな、何を悩む必要がある……」

先程の鬱つぽい表情とは違ひ……数段も生き生きとした青年の顔がそこにあつた。

「別に後ろめたいことをしているわけじゃない。やつていることは、誇れることははずだ。馬鹿げていいだとか矛盾しているとか、そんなことはどうでもいい。歪み上等、変人上等。誰が何と言おうと、いざれ災厄をもたらすこの戦争を解体するのは、間違いじゃないはずだ」

活力がみなぎっていく主人の姿にキャスターは喜びの表情を浮かべる。ああ、やつぱりこの人がマスターで良かつた。自分は本当に幸運だ。

「『』主人様。お忘れかもしませんが、ここは私にとつても前世の故郷なのですよ。となれば、私もそんな腐った聖杯なんて見逃せません！」

「ハハッ、そう言えばそうだったな。ありがとうキャスター。しかし、改めて考えてみると、俺と君は確かに相性が良かつたんだろうな……」

「なつー？』、『主人様！い、今のは”オレの嫁宣言”と見て、間違いありませんね！？』

はつ？え！？ 何その飛躍？

「ああーっ、もう録音しました！もうぐるぐるですー既に脳内再生数1000回を超えています！」

「おー…キャスター？」

「コメント数なんてその十倍！マイリスは私しかしてませんけど、むしろ私だけのメモリアルとして永久保存です！！」

喜びのあまり飛び起きて屋根をぴょんぴょんと跳ね回るキャスター。素晴らしいジャンプ力だと益体もないことを考えながら、暴走気味の我が相棒を眺める。あの分じゃ屋根の下の人にとってつもなく迷惑な可能性が高い。

突如シリアス100%な空気が一気に弛緩してしまったが、まあこっちの方がいいだろ？……うん、それは間違いない。

## 第十二話 正義の味方の苦労にて（前編）

遅くなりました。

今回は一話続けて投稿します。

いつの間にか40万PV突破！ありがとうございます。

セイバーとアイリスフイールがその報せを受けたのは、数時間前だつた。

衛宮切嗣の負傷。彼の相棒兼助手である久宇舞弥の口から告げられたその事実は、アイリスフイールは勿論、切嗣との軋轢に悩んでいたセイバーをも迷いなく急行させるには十分なもので、全速力でメルセデスを飛ばした二人は一時間足らずで用意された拠点に到着した。

冬木市内部の奥深く 土地のオーナーである遠坂、間桐の拠点にも目と鼻の先にあたる位置にその拠点はあつた。外見は歴史を感じさせる武家屋敷といった風情で、その敷地面積は現代の一軒家としてはかなりの広さを持つていて。こことは別に、郊外の森にも最初から用意されたアインツベルンの城があるのだが、場所が割れているあそこでは、いつ襲撃を受けるか分かつたものではない。その点この屋敷は身を隠しておくには最適と言える位置にある。まさかセカンドオーナーのお膝下にアインツベルンが拠点を構えているとは想像もすまい。灯台下暗し、というやつである。

現在この家屋にいるのは二人。負傷し施術を受けている切嗣と、彼を治療しているアイリスフイール。そして護衛として待機しているセイバーである。舞弥は事前に切嗣から命じられていた索敵などの任務を続けるべく、出払っている。

屋敷内の空気は重い。特にセイバーの心境は手術の終わりを待つ患者の身内のそれと全く同じもので、待っている間はこの拠点の検分

などで時間を潰しているが、その内心は穏やかなものではない。

約一時間後、ようやく治療が一段落したのか奥の部屋からアイリス・フイールが出てきた。セイバーにとっては永遠のようにも感じられた緊張の時間も遂に終わりを告げる。

「お待たせ、セイバー。ひとまず出来るだけの処置はしたわ

安心させるよう柔らかな口調で告げるアイリス・フイールだが、その顔には疲労の色が濃い。無理もないだろう。

一流の魔術師であるアイリス・フイールも治癒魔術はお手の物だが、元々彼女の魔術はアインツベルンの鍊金術体系に連なるものである。普通の治癒のように組織を再生させるのではなく、一から体組織を鍊成し直さなければならないその作業はお世辞にも効率がいいとは言えず、術者である彼女にも多大な負担がかかるのだ。

「アイリス・フイール、切嗣の容態は？」

「普通に過ごす分には問題ないけど、戦闘はしばらく無理だと思つわ……」

そう告げられるセイバーの顔には、ありありと苦渋の色が浮かんでいた。マスターの怪我を悼む気持ちもあるが、彼女にとつて何より無念だったのは、切嗣の判断のことである。

ここに来るまでに委細は舞弥から聞いていた。新しい装備を受け取りに行つたビルで、例の『死徒殺し』の襲撃を受け、戦闘を行つこまでダメージを負つたと……。だが聞く限りでは、令呪で自分を呼んでもれば切嗣は無事だったのではないか？

確かにこんな緒戦から令呪を使うのは最善とは言い難い。しかし舞弥からの報告では一步間違えれば切嗣は命を落としていたというではないか。

いくら令呪が貴重でも、切嗣が倒れたら意味がないのだ。相手の危険性は事前に承知していたはずなのに、それでも切嗣は単独で戦つた。それは機械的なまでに即座に最善の判断を下す彼らしくなさざる。

それなのに自分を呼ばなかつたのは、単純に自分と会いたくなかつたからなのでは……というのがセイバーの予想だった。

セイバーを召喚すれば、切嗣とは間違いなく一人きりになる。そうなればどうしても、命令なり何なり会話をする必要性が出てくる。意識してかはわからないが、どうしてもそれを避けたかつたがゆえに令呪を使わなかつたのではないだろうか……。

そんなセイバーの心境を読み取つたのか、アイリスファイールが声をかける。

「セイバー、切嗣は……」

とはいつても、どんな言葉をかけたらしいのかわからない。気の利いた激励も、慰めの言葉も彼女には思いつかなかつた。

「ありがとうございます、アイリスファイール。私は大丈夫です……」

代理マスターの苦悩にセイバーは笑顔で答えるが、やはり無理をしている感が否めない。これほど心が通じ合えていない主従というの

も珍しいだろうが、悲しいかな……現実である。

「アイリスフィール、切嗣の看護をお願いします。私は周囲の警戒にあたりますので……」

そう言って外へと向かうセイバー。去っていく騎士王の小さな背中には悲しい哀愁が漂っていた。

気高い従者を見送った後、アイリスフィールは夫が眠る奥の部屋へと入った。

切嗣は既に起き上がりっていた。体の各部の点検をしているようで、あちこちを触つたり掴んだりしている。

「切嗣、体の具合はどう?」

「ああ、ありがとうアイリ。もう大丈夫だよ。心配かけた」

優しげに答える切嗣。確かに傷の方は既に完治しているし、もう大丈夫だろう。多少の倦怠感は残っているだろうが。あとはじっくり時間をかけて、再構成した体組織が体に馴染むのを待つだけだ。

「ねえ、切嗣……どうしてセイバーを呼ばなかつたの?」

訊くべきではないし、訊かれたくもないだろうが、今回ばかりは別だ。この夫がセイバーを過剰なまでに避けているのはこれまでのことからもわかつていたし、理解もできる。

片や最後まで自らの誇りを貫き通す騎士の中の騎士。

片や結果のためならどんな悪辣な手段も辞さない暗殺者。

同じ戦うものでありながら、正反対。そんなあまりにも違う価値観の一人がぶつかれば、反発し合つのは目に見えている。だがそれが今回のような事態を招くというなら放任は出来ない。いくら相性が悪くてもこざというとき最低限のコンビネーションすらとれないようでは、これから戦いで確実にツケが廻つてくる。

対して切嗣は無言。ただ俯いて沈黙を貫く。

「切嗣……」

自然、声音が厳しくなるが引くわけにはいかない。今回のこととは、何としてもハツキリさせておかねばならないのだ。

だが彼女の口から追求の言葉は出なかつた。

……震えている、切嗣の身体が。

それだけではない。切嗣の表情もこれまでの冷徹なものとはかけ離れた……まるで怖いものを見た子供のように弱々しい。今にも泣き出してしまうしそうだ。

「切嗣、貴方は

「

戸惑うアイリスファイールが言葉を重ねる前に、切嗣は彼女を抱きしめていた。しかし震えは一向におさまらず、その姿は母に縋る幼児そのままだった。

「アイリ……僕は」

耐えられなくなつたのだろう。嗚咽を漏らしながら独白する。

「言峰綺礼が　　僕を狙つてた。あの危険な奴が……僕に目を付けたんだ。『死徒殺し』も……あいつら一人とも、化け物だ。行動を読まれて……まるで歯が立たなかつた。……僕は、負けるかもしねりない」

この瞬間　　アイリスファイールは理解した。

確かに切嗣はセイバーと相容れない。だがこの人がその程度のことでの自らの最大戦力であるサーヴァントを拒絶する訳がない。そんな理由でこの人がわざわざ不利に陥るような真似をするはずがない。

切嗣は既に限界だつたのだ。アインツベルンでの九年が彼を変えた。出会つたばかりのあの頃の……まさに一個の戦闘機械そのものだつた彼を。誰よりも容赦なく、誰よりも冷たく、誰よりも強かつたこの『魔術師殺し』を変えてしまつた。

妻と娘　　それは戦場で救済を続ける切嗣の人生には、本来あつてはならないものだつたのだ。喪うものなど何もないからこそ、この男は誰よりも苛烈であり続けられた。

今切嗣に求められているのは、そんなかつての彼に立ち戻ること。だが愛する者を得てしまつた切嗣がいくら頑張つたところで、昔の

非常な自分に完全に戻れるわけがない。

セイバーへの拒絶も、つまりはそういうこと。彼にとつては、往年の『魔術師殺し』を演じるだけで精一杯だったのだ。それこそセイバーと協調する余裕さえないほどに今の切嗣の精神は追い詰められている。

そしてアイリスフィールは歯痒かつた。最愛の夫がここまで追い込まれているというのに、自分には何も出来ない。いや、そもそも切嗣の心の軋みは自分とイリヤが原因なのだ。それを後悔したりなどしないが、彼の足枷になるなど耐えられない。

「貴方一人に……辛い思いはさせない」

だからアイリスフィールは切嗣を抱きしめる。彼の震えが止まるまで、彼の嗚咽が終わるまで。

「私が守る。セイバーが守る。それに……舞弥さんも、いる」

認めるしかない……今の切嗣に最も必要なのは自分ではない。もつと古く、もつとずっと昔から彼と戦場を共にしてきた彼女……久宇舞弥。彼女だけが切嗣の強さを呼び戻せる可能性を持つている。

だが今だけは彼を抱きしめていよう。たとえ気休めにしかならなくとも、それでこの人が少しでも楽になるのなら……。

## 第十四話 間桐家潜入にて（前書き）

十四話です。

連続投稿よろしくお願いします。

## 第十四話 間桐家潜入にて

「何というか……暗いな」

「ですね」

勇んで間桐邸にやつてきたこの主従 シルバー・フォックスとキャスターだが、いざモノホンの前に来て早くもそのテンションは最悪に下がっていた。

フォックスと魔術師の館を訪ねるのが初めてというわけではないが、目の前的一般人が見れば普通に素敵な洋館は、彼からすれば今まで一番汚い建物だった。

まず第一に暗い。いや、実際に暗いんじゃなくてなんかこう、雰囲気が。家の結界、全体から漂う魔のオーラ。全てが何か暗い。あと嫌な臭いがする。いつも笑顔を絶やさないキャスターも、今回は露骨に不愉快そうだ。

とはいっても、いつまでもここで立っているわけにもいかない。さつさと桜を救出し、サクッとあの妖怪を始末して家に帰ろう。うん、それがいい。

「キャスター、やつてくれ

「はい……」<sup>マスター</sup>主人様

過去のトラウマからキャスターは術の行使を嫌う傾向にある。それ

でもフォックスのためなら辞さないのだが、今日はことさら嫌なものを見たのでいつもに輪をかけて嫌々術を発動する。

張られたのは結界。屋敷全体を隠す球状のものだ。間桐の元々の結界をさらに覆う形で展開される。これで中の人間の逃げ道は封じた。

「よし、入るか」

雁夜から教えられた手順で結界をすり抜け、一人は魔窟へと足を踏み入れる。巨大な外観通り、家の内部はなかなか広いが、どこか陰気臭い。

「さて、雁夜によれば今日は休日らしいが……」

ズカズカとまるで勝手知ったる家のごとく歩を進める一人。家の内部は既に雁夜に聞いた上、目的の部屋もハッキリしているので迷うことはない。

案の定、たどり着いた部屋には田代の少女がいた。第一の目的

間桐桜である。

普段は蟲巣に放り込まれて間桐の”教育”を受けている彼女だが、何も毎日ではない。器が壊れないよう、何日に一度かは休憩を取る。雁夜によれば、都合良く今日はその田らしいので、蟲に犯されている間よりも保護にかかる手間が省ける。

突如自室に入ってきた侵入者に桜は驚きの顔をするが、次の瞬間には元通り。この家に来てから身に付けた底抜けに虚ろな目に戻っていた。

それだけでこの少女がどのような仕打ちを受けてきたかは想像に難くない。魔術師の端くれなら嫌でもその存在を感じ取れるであろうサーヴァントが目の前にいて、明らかに襲撃者じみた雰囲気を醸し出す男がいても、何の反応も示さないのだから。

幼くして既に絶望で心を覆い隠さねば生きられない地獄を経験した少女。間近で見たその事実にフォックスは一瞬目を細めるが、打ち合わせ通りに己がサーヴァントに指示を出す。

「キャスター。札を」

「はい」

短い返答と共にキャスターから式符が射出される。無数に射り出されたソレらは、桜の体全体に巻き付き、意識を奪つた。

これはアパートで張つたリンクカットの結界の簡易版であり、対象の人間のみを外界からの魔術的干渉をシャットアウトする。眠らせたのは運ぶのが楽だからだ。

寝息をたてる桜を抱えると、フォックスたちは地下へと向かつた。ここまで来て姿が見えないなら、あの男は蟲藏にいるはず……。

フォックスとキャスターは教えられた通路に沿つて進んでいく。ここから先は最も警戒しなければならない。なにしろ数百年の歴史を重ねる間桐の工房だ。そしてあの妖怪が最も十全に力を發揮できるフィールド。降りるに連れて光は失われ、代わりに魔界の瘴気のような負の波動が地下の奥深くから流れてくる。

その空氣の源泉である最奥の扉に一人は辿り着いた。

そこには何もなかった。部屋全体には規則正しく四角い穴が穿たれ、その雰囲気はひと目でこの場が魔の巣窟であることを認識させるが、およそ魔術師の工房らしくない程内部は殺風景だ。かなりのスペースはあっても魔術的な道具はおろか、机一つない。『水』の属性を持つ間桐らしく、内部はかなり湿氣り、縁に濁つた闇の光が工房を照らしている。

そして部屋の奥……そこに彼はいた。

聖杯戦争の考案者の一人。秘術によって体を蟲に置き換え、五百年もの間生きながらえてきた老魔術師。御三家の一角間桐の怪物、間桐臓硯。

「よく来たの客人。もてなしは出来んがゆっくりしていくがいい」「別にもてなしてもう必要はない。アンタに死んでもうればそれでいいからな、間桐の老翁」

力力カツ、と臓硯は嗤いをこぼす。普通魔術師がサーヴァントを伴つて襲撃に来たならもう少し別の反応をするだろうが数百年を生きるこの老獏には何ほどのこともあるんとということなのだろう。ここは彼の工房。勝てるとまでは思つてないが、逃げる手段も、目の前の若者に一矢報いる手段もいくらでも用意してある。

「フム、わしを殺す……か。何故じやな? 生憎わしはマスターではない、部外者じや。サーヴァントを従えるお主と敵対する理由はないぞ」

「あるとも。アンタの死は俺も、間桐雁夜も望んでいる

雁夜の名前が出ると臓硯は不機嫌そうに顔を顰めフンッ、と鼻を鳴らす。

「あの出来損ないめが、やはりそういうことか。結界を抜け、貴様が桜を抱えている時点で予想はしてたが。雁夜の蟲が反応しなくなつたのも貴様らの仕業じゃな」

「ああ、その通り。その上で聞くが、考案者のアンタは気づいているんじゃないのか？この聖杯戦争がおかしくなつたことに」

その言葉に臓硯は萎びた目を一瞬限界まで開き、感心したような表情を見せる。

「ホウ、御三家ならともかく、外来の魔術師に勘づいたものがおつたとは。力カツ、これは愉快。応とも、若造。お主の言う通り。前回のアレを記憶しておれば異常に気づいて然るべきじやろうに」

臓硯は遠坂や監督役も知らない事実に辿り着いた目の前の魔術師に興味が湧いたらしい。かなり上機嫌に話し始める。

「元々わしはな、今回は様子見に徹すると決めておつた。"あんなモノ"が召喚された以上、間違いなく聖杯戦争のシステムには狂いが生じておる。まずはそれが何なのか突き止めることこそ肝要なのでな。それを見極めた上で桜の子供か孫を次の戦いに参加させる予定じやつた」

その言葉にフォックスは訝しげに臓硯を見やる。彼の前世の原作知識には所々穴があり、臓硯の思惑についても詳しい部分は覚えていなかった。故にこの老魔術師の言つことに彼は違和感を感じたのだ。

「では何のために雁夜を参加させた？勝つ気などないくせに、何故わざわざあんな強力なサーヴァントを用意してやった？」

「なあに、いくら傍観に徹するとはいっても、せつかくの祭りをただ眺めているだけというのも味気ない。俄魔術師のあやつが魔力を食い潰すバーサーカーを駆り、どこまでいけるか見るのは實に良い余興じゃ」

楽しそうに語る臓硯にフォックスの表情が固くなる。

「ではわざわざ雁夜にバーサーカーを召喚させたのはそういうことだつたのか？」

「然りじゃ。無論あの木偶が億に一つの確率で聖杯を持ち帰つてきたならそれに越したことはないが。悪い癖じや。せつかくの上手くやれば勝てるやもしれん博打をあやつの苦しみ足搔く姿を見たいが故に捨ててしまおうか實に迷つわい」

要するにそういうことだつたのだ。この老人の本命はあくまで次であり、今回はあくまで茶番。雁夜の願いに応え、彼をマスターにしてやつたのも全ては娛樂のため。維持するだけでも膨大な魔力を食うバーサーカーで雁夜が戦うには刻印虫の力に頼るしかないが、そのために地獄の苦痛と引き換えに魔力を供給するのも全ては計算の上。叶わぬ望みのために雁夜が必死に足掻き、最後には苦しみ抜いて無様な末路を晒すのを見物するのがこの外道の目的だつたのだ。

元よりフォックスとて田の前の老人にまともな人間性など期待していないが、さすがに面と向かって語られると嫌悪感を抱かずにはいられない。

もはや話すこともない。唯一真実を知っていたと思われる人物の確証がとれた以上、この妖怪にはさつさとじに退場願おつ。

「貴方の願いは何ですか？」

唐突に今まで黙っていたキャスターが口を開いた。フォックスもそうだが、臓硯も軽く驚いた顔をしている。ずっと黙っていたので、てっきり目の前のサーヴァントは無口なのかと考えていたからだ。

ただ、フォックスはキャスターの声に何か不吉なものを感じている。彼女の顔も、いつも天真爛漫なそれとは違つ、感情が読み取れない無表情だ。

「フム、いきなり何を言い出すかと思えば。サーヴァントよ、何故そのようなことを訊く？」

「だつて何百年も魔術で無理やり生き続けて、拳句にこんな女の子を壊して使い捨てにしてまで叶えたい願いだなんて、気になります」

カカカカツ、と蟲の翁は大笑いした。

「ワシの願いか!? そんなに気になるなら教えてしんせよう。ワシの悲願はただ一つ。この身を不老不死とすることじや！ 魔術の延命では限界があるからの。時間とともに体も魂も崩れしていく。それではダメじや。聖杯の力なら、完璧なる永遠の命を手に入れられる！」

間桐臓硯。旧名マキリ・ゾオルケンは、かつては高潔な理想に燃えた人物だった。

それは”この世の全ての悪の根絶”。世界にはどうしようもなく悪があり、争いがある。世界から悪を取り除けない以上、聖杯の力で悪を生み出す人間そのものを成長させるという尊い願い。そのための聖杯戦争。そのための延命だった。

それが今やこの様だ。長い年月と共に魂は腐り果て、他者をいたぶることに愉悦を見出す外道と成り果てた。結果として残つたのは、ただ生に縋り付く妄執の念だけだ。

「……そうですか」

小さく呟くとキャスターは視線を下げる。同時に臓硯も彼女の異様な雰囲気に気づいたのだろう。まるで嵐の前の静けさのような静寂が工房内に起つる。

「私はイケメンが大好きなんです。顔は勿論ですが、魂がイケメンならすぐ惚れちゃいます。その点ご主人様は最高です。それなのに貴方ときたら……」

ビリビリと彼女の体から発せられるのは、殺氣。フォックスも初めて見るキャスターの怒りの感情。

「何ですかそれ？臭いし臭うし、不愉快です。こんな汚らわしい魂見たの初めてですよ。アハハ、よおし決めました！徹底的にぶつ潰す……」

キャスターは自分のことを弱いサーヴァントだとつっていたが、それは誤りだ。今の彼女と対峙したらおそらくあの英雄王も裸足で逃げ出すに違いない。これまで余裕の態度を崩さなかつた臓硯もキャスターの気迫に腰が引けてきている。

「フ、フン！馬鹿めが！雁夜と音信不通になつたワシが、何の準備もしていないと思つてか！？」

ゾゾゾゾと現れたのは蟲……間桐の得意とする蟲術だ。主を守るべく呼びされた醜悪な城壁が部屋一面にビッシリと展開される。当の臓硯はキャスターの迫力にあてられて若干ビビリ氣味だが、決して虚勢ばかりではないらしい。この襲撃まで時間は十分あつたのだから、何らかの対策は立てているのだろうが。

「『<sup>マスター</sup>主人様、ここはお任せ下さい。この棺桶に片足突っ込んだくたばり損ないの糞蟲はこの私が！』

「あ……ああ。よろしく頼むキャスター……」

朗らかな声で宣言するが、内容に毒がありすぎて引きついた返答しか出来ない彼を誰が責められよう。

「死んでください」

冷ややかな死刑宣告と共にキャスターは一枚の札を取り出し、投げた。

「氷点よ、碎け！」

呪相・氷天 文字通り対象を氷漬けにするキャスターの呪術の一つ。炎はこの湿つた密室内では不利なので、その選択は正しい。

「彫像の出来上がりです」

キャスターの宣言通り、そこには全身氷漬けとなつた臓硯がいた。

次の瞬間には氷が砕け、後に残つたのは砂のように細かな残骸のみ。普通はこれだけで間違いなく死亡確定だが、そこは魔術師。凍氣から逃れた周りの蟲たちがグチュグチュと集まり、再び臓硯の体を形成していく。

「力力カツ、無駄じや無駄じやーお主たちはワシに時間を『えすぎたのよ！ワシの身体は蟲で出来ておる。既に予備の身体になる蟲たちをこの屋敷の隅々まで配置すみじや。それを全部跡形もなく消すなど不可能よ。よしんば出来るにしても、そこまで派手なことをすれば他のマスター共はどう思うかのう？」

間桐臓硯。この数百年を生きる怪人は仮初の不老不死を実現すべく、自らの肉体の全てを得意の蟲たちに置き換えた。彼を殺すなら魂の本体がある蟲を潰す必要があるが、それは逃げ場をなくした上でなければ難しい。少なくともここにいる分離用の蟲の大群全てを一匹残らず死滅させねば、臓硯を殺すことはできないのだ。

それほどのことをすれば漁夫の利を狙つマスターたちが動き出すのは間違いない。ここも御三家の一角である以上、監視用の使い魔が結界の外から見張つている可能性は十分ある。

「惨めですねー。今までして生きたかったんですか？」

が、そんな臓硯をキャスターは嘲る。それがどうしたの言わんばかりだ。

「『<sup>マスター</sup>主人様、少しお腹に力をいれてください』

不意にそんなことを言つキャスターにフォックスは困惑するが、言

われた通り腹筋に力を籠める。

「あなたの魔力、分けてもらいますね？」

それは来た 突如として暴力的なまでの魔力の嵐が巻き起こる。その渦の中心はキャスター。台風の眼となつた彼女に周囲の魔力が片つ端から収束していく。

「ガツ、こ、これは！？」

全身を襲う言ひようのない虚脱感。まるで自身の魔力と命を根こそぎ持つていいくような感覚に臓窓とフォックスは呻く。

**呪法・吸精** キャスターの呪術の一つであり、文字通り標的の魔力を奪う術。この場合、本来は味方を巻き込みないよう規模を小さく抑えて、術に指向性をもたせるのだが、今回は桁が違う。キャスターが間桐家全体に張つた結界内の魔力の全てが強制的に集められていいく。

規模が大きすぎて無差別の吸引力と化したそれは、マスターであるフォックスにも例外なく作用し、魔力を奪つていく。半永久的に魔力を生み出せるフォックスでなければ間違いなく死んでいるだろう。この場で苦しんでいないのは、式符で魔術的干渉をシャットアウトされている桜だけだ。

そして臓窓の方はより深刻だつた。彼は自身の魔力のほぼ全てを体を形成している蟲たちの維持に使用しているのだ。

「さて、ここで問題です。確かにこの屋敷の蟲たちを全部殺るのは骨が折れますけど、そこは蟲。一匹一匹はとても弱いです。それらの命の源である魔力を根こそぎ奪えれば、どうなるでしょうか？」

答えは火を見るより明らかだつた。今臓硯に迫つてゐるのは紛れもない死。だがこれは決して彼が油断していたというわけではない。単に儀式陣もなくこんな術を躊躇なく発動した目の前のサーヴァントが規格外だつただけだ。

時に蟲は人間に牙をむくが、この場合は駆除される側にまわつたらしい。

果たして、あまりにもあっけなく、遺言を残す魔力すら奪われた臓硯は、魂ごとの世から消え去つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3045x/>

---

二人の狐の聖杯戦記

2011年10月31日19時03分発行